

正宗蓮日

教學小辭典

編輯部教學會創

創 會 學 會

△要語解説五十音索引△

あ

阿育大王……………三六五
 熱原法難……………三六一
 阿仏房……………三九〇
 阿羅漢……………三六
 安樂行品……………七

い

池上兄弟……………三八四
 池上と中山……………三九六
 以信代慧……………三三一
 イスラム教……………四八
 異体同心……………三五
 一大事因縁……………九一
 一念三千……………一七九
 一品二半……………一五七

因果俱時……………一九五

う

有徳王と覚徳比丘……………三四

え

依義判文……………二二〇
 演繹法と帰納法……………四三三

お

小樽問答……………四二七
 御義口伝……………二八〇

か

開三願一……………六
 開示悟入……………八
 戒定慧……………三七

戒壇建立……………二八六

開目抄……………二二四

科学と宗教……………四四五

価値論……………四四九

勸持品……………六七、二〇四

観心本尊抄……………二二五

観世音菩薩普門品……………七五

観普賢菩薩行法経……………八〇

き

機……………一三六

記小久成……………九四

義真和尚……………三七五

九十五派のバラモン……………四三〇

旧本門宗……………四〇五

教……………一三五

教相・観心……………二六二

境智冥合……………二五九

經典の結集……………三四二

京都の一致派……………三九七

教法流布の先後	一四〇
行滿座主	三七三
キリスト教	四二六

く

空仮中の三諦	二〇
久遠名字即	二五七
国	一三八
供養	三九

け

化儀の四教	九
華嚴宗の教義	一六
下種本因妙	二五
化城喻品	三三
化法の四教	五
外用と内証	二〇八
現証	一四九
還著於本人	三〇一
見宝塔品	三〇五

頤本法華宗	四〇一
頤益・冥益	三〇九

こ

劫	四九
広開近頤遠	九六
孝道教団	四二
五逆罪	四三
五五百歳広宣流布	一七五
五時	二
五重玄	一九
五重三段	一五
五十展転	三〇七
五十二位	一九
五重の相對	一四〇
五種の妙行	一三四
五濁	四六
国家諫曉	三五〇
五百弟子受記品	三六
今此三界	二一

さ

權実相對	一四三
三因仏性	二〇〇
三界	三
三箇の勅宣	一〇二
三災七難	四四
三時の弘教	一六八
三十二相	三五
三周の聲聞	九〇
三重秘伝	一九九
三種の教相	三二
三種の法華経	六六
三証	一四七
三障四魔	二九七
三身	一九二
三世間	二〇
三千塵点劫と五百塵点劫	三三
三大秘法	三三
三變土田	三

三 宝	一六
三方便	二五
三類の強敵	二五
三 惑	一九

し

自我偈	一〇九
色心不二	二五〇
直達正觀	二八三
自行化他	三三八
四句の要法	二九
四箇の格言	一〇
四悉檀	二〇四
四 衆	二四
四重興廢	一五〇
自受用身の勝劣	二七四
四条金吾頼基	三六二
四 諦	二九
七 譬	八七
十界互具	一八二

実存哲学	四九
示同凡夫	二七三
事と理	一八一
舍衛の三億	一七六
釈迦仏像を本尊としない理由	二四
釈尊の一生	三三六
釈尊の九横の大難	三
迹門と本門	八四
從因至果・從果向因	二六
宗教の五綱	一三四
十四誹謗	二九
從地涌出品	六
十大部	二六
十二因縁	二九
十如是	一八四
十羅刹女	五二
授学無学人記品	六
授記品	三
儒 教	四三
宿縁深厚	二五

主師親の三徳	二五
受持即觀心	二六三
種熟脱	一九七
種脱相對	一四
地涌の菩薩	一六
寿量品の三妙合論	一六
順縁・逆縁	二四
章安大師	三七
生死一大事血脈	二六
授受・折伏	二九
淨蔵・淨眼	二三
淨土宗の教義	二
常不輕菩薩品	三
正法一千年間の弘教	一六
声聞の十大弟子	三
常樂我淨	二六
初住位の本因と久遠元初の本因	二六
諸天の加護	三六
序品	七

信解品	二六
真言宗の教義	三

す

随縁真如の智	二七七
随喜功德品	二七
垂迹と再誕	二六八
随方毘尼	三三三
砂村問答	四四四

せ

性善説と性悪説	四四五
世法と仏法	三四
前三・後三	二二
禪宗の教義	三
染浄の二法	二七二
善知識・悪知識	三三三

そ

相待妙・絶待妙	二〇六
---------	-----

総別の二義	二六
-------	----

像法一千年間の弘教	一六九
-----------	-----

草木成仏	二六六
------	-----

即身成仏	二五三
------	-----

嘱累品	七三
-----	----

た

大綱と網目	二九
-------	----

大御本尊への疑難を破す	三三
-------------	----

大小相對	一四二
------	-----

大通智勝仏	二〇二
-------	-----

体内・体外	二〇七
-------	-----

提婆達多	三六四
------	-----

提婆達多品	六六
-------	----

多宝の塔	一〇六
------	-----

陀羅尼品	七六
------	----

ち

中国への仏教伝来	三四
----------	----

て

伝教大師	三三四
------	-----

霽志問答	四六
------	----

転重軽受	三〇六
------	-----

天台宗の教義	一七
--------	----

天台大師	三七〇
------	-----

と

動執生疑	一五九
------	-----

道邈和尚	三三三
------	-----

当体蓮華	二四七
------	-----

時	一三七
---	-----

富木常忍	三六七
------	-----

な

内外相對	一四二
------	-----

南岳大師	三七二
------	-----

南条時光	三八五
------	-----

に

二箇相承	三七七
------	-----

日有上人	三七七
日寛上人	三七七
日目上人	三七五
日蓮宗一致派	三九一
日蓮宗不受不施派、同	
講門派	三九七
日蓮大聖人のご一生	三四八
日興上人	三三三
日本への仏教伝来	三四六
如是我聞	三八三
如説修行	三七七
女人成仏	三三三
如来寿量品	三九六
如来神力品	三七三
如来秘密神通之力	二七三
人法一箇	二四六

は

八教	五
八相作仏	三四

原殿御書	三六〇
------	-----

ひ

譬喩品	六〇
病氣の原因	三〇三
ヒンズー教	四三二

ふ

不軽品の意義	一二三
福 運	三〇八
福十号に過ぐ	二八三
普賢菩薩勸発品	七六
不自惜身命	三二一
付法蔵の二十四人	三七七
プラグマティズム	四四一
分別功德品	七〇

へ

変毒為藥	三〇五
------	-----

ほ

方便品	七〇
方便品・寿量品を	
読誦する意味	三三三
謗法厳戒	三〇〇
法華経の新訳・旧訳	三四五
法華経八卷二十八品	三六
法華宗	四〇三
法師功德品	七二
法師品	六四
發迹顯本	九七
本因の境智行位	二七五
本化付嘱と迹化付嘱	二五
本迹相對	一四三
煩惱即菩提	二六六
本仏論の遮難	二七八
本門戒壇の大御本尊	三三五
本門八品の意味	一〇三
本門法華宗および仏立宗等	三九七

要語解説

目次

第一編 仏教一般

四諦……………二九

十二因縁……………二九

六波羅蜜……………三一

三界……………三一

八相作仏……………三三

三十二相……………三三

阿羅漢……………三六

戒定慧……………三七

五逆罪……………四〇

三災七難……………四〇

五濁……………四六

劣応身・勝応身……………四八

劫……………四九

十羅刹女……………五一

声聞の十大弟子……………五一

釈尊の九横の大難……………五三

五時……………二

八教……………五

四箇の格言……………一〇

浄土宗の教義……………二

禪宗の教義……………三

真言宗の教義……………三

律宗の教義……………五

華嚴宗の教義……………六

天台宗の教義……………七

三惑……………九

空仮中の三諦……………二〇

第二編 法華經に関するもの

法華經八卷二十八品	五
如是我聞	六
迹門と本門	六
三種の法華經	六
七譬	七
開三顯一	八
開示悟入	九
三周の聲聞	九
一大事因縁	九
三變土田	九
三千塵点劫と五百塵点劫	九
記小久成	九
略開近顯遠	九
広開近顯遠	九

発迹顯本	九
六難九易	九
竜女・提婆	九
大通智勝仏	一〇
三箇の勅宣	一〇
本門八品の意味	一〇
勸持品	一〇
多宝の塔	一〇
靈鷲山	一〇
自我偈	一〇
三世間	一〇
今此三界	一一
不輕品の意義	一一
淨藏・淨眼	一一
四衆	一二
本化付嘱と迹化付嘱	一二

摩訶止觀……………一七

六即……………一六

五十二位……………一九

三種の教相……………二三

五種の妙行……………二四

從因至果・從果向因……………二六

四句の要法……………二九

第三編 日蓮大聖人の教義

宗教の五綱……………一四

五重の相對……………一四〇

三証……………一四七

三重秘伝……………一四九

四重興廢……………一五〇

五重三段……………一五一

文底秘沈……………一五三

文底下種三段……………一五四

流通分……………一五五

一品二半……………一五七

地涌の菩薩……………一五八

寿量品の三妙合論……………一六六

三時の弘教……………一六六

五五百歳広宣流布……………一七五

舍衛の三億……………一七六

一念三千……………一七九

事と理……………一八一

十界互具……………一八二

十如是……………一八四

三身……………一九二

因果俱時……………一九五

三宝……………一九六

種熟脱……………一九七

五重玄	一九
三因仏性	二〇〇
四悉檀	二〇四
三方便	二〇五
相待妙・絶待妙	二〇六
体内・体外	二〇七
外用と内証	二〇八
依義判文	二一〇
前三・後三	二一一
立正安国論	二二三
開目抄	二二四
觀心本尊抄	二二五
十大部	二二六
大綱と綱目	二二九

第四編 三大秘法

三大秘法	二三
本門戒壇の大御本尊	二三
戒壇建立	二三八
末法の御本仏	二四一
人法一箇	二四六
当体蓮華	二四七
色心不二	二五〇
下種本因妙	二五一
即身成仏	二五三
主師親の三徳	二五四
久遠名字即	二五七
境智冥合	二五九
末法の觀心	二六〇
教相・觀心	二六三
受持即觀心	二六三
煩惱即菩提	二六六

常樂我淨……………	二七
總別の二義……………	二六
生死一大事血脈……………	二九
染淨の二法……………	二七
示同凡夫……………	二七
如来秘密神通之力……………	二七
自受用身の勝劣……………	二七
本因の境智行位……………	二五
初住位の本因と久遠元初の本因……………	二六
随縁真如の智……………	二七
本仏論の遮難……………	二六
御義口伝……………	二六
我が身即妙法蓮華經……………	二二
直達正觀……………	二三
福十号に過ぐ……………	二三
宿縁深厚……………	二五

草木成仏……………	二六
垂迹と再誕……………	二八

第五編 信心修行

授受・折伏……………	二二
順縁・逆縁……………	二四
三類の強敵……………	二五
三障四魔……………	二七
十四誹謗……………	二九
謗法嚴戒……………	三〇
還著於本人……………	三〇
病氣の原因……………	三三
変毒為藥……………	三五
転重軽受……………	三六
五十展転……………	三七
福運……………	三八

顕益・冥益……………三〇九

不自惜身命……………三二一

有徳王と覚徳比丘……………三二四

異体同心……………三二五

如説修行……………三二七

自行化他……………三三八

聞法下種と発心下種……………三三九

以信代慧……………三三一

随方毘尼……………三三三

善知識・悪知識……………三三三

世法と仏法……………三三四

勇猛精進……………三三五

諸天の加護……………三三六

魔の通力……………三三七

供養……………三三九

臨終の相……………三三一

女人成仏……………三三三

方便品・寿量品を讀誦する意味……………三三三

第六編 仏教史

釈尊の一生……………三三六

付法蔵の二十四人……………三三七

經典の結集……………三三四

中国への仏教伝来……………三三四

法華經の新訳・旧訳……………三三五

日本への仏教伝来……………三三六

日蓮大聖人のご一生……………三三八

国家諫曉……………三三〇

日興上人……………三三二

六老僧……………三三五

二箇相承……………三三七

身延離山……………三三八

原殿御書……………三六〇

熱原法難……………三六一

提婆達多……………三六四

阿育大王……………三六五

竜樹・天親……………三六七

天台大師……………三七〇

妙樂大師……………三七二

伝教大師……………三七四

日目上人……………三七五

日有上人……………三七七

日寛上人……………三七七

六卷抄……………三七八

四条金吾頼基……………三八二

池上兄弟……………三八四

南条時光……………三八五

富木常忍……………三八七

阿仏房……………三九〇

日蓮宗一致派……………三九一

本門法華宗（旧八品派）および仏立宗等……………三九七

顕本法華宗……………四〇一

法華宗……………四〇三

旧本門宗……………四〇五

立正佼成会……………四〇七

孝道教団……………四一二

砂村問答……………四一四

霑志問答……………四一六

小樽問答……………四一七

第七編 古今の思想哲学の

説明と批判

九十五派のバラモン……………四二〇

儒教……………四二三

ユダヤ教	四二四
キリスト教	四二六
イスラム教	四二八
ヒンズー教	四三一
演繹法と帰納法	四三三
性善説と性悪説	四三五
唯物論と唯心論	四三七
実存哲学	四三九
プラグマティズム（実用主義）	四四一
唯物弁証法	四四三
科学と宗教	四四五
価値論	四四九

第二編

法華經に関するもの

【法華經八卷二十八品】
ほけきようはつかんにじゅうはつほん

法華經は八卷二十八品からなり、開經の無量義經、結經の仏説觀普賢菩薩行法經各一卷を入れて十巻ともい
う。その内容を巻別にあげれば、

無量義經（開經）|| 德行品第一、説法品第二、十功德品第三

妙法蓮華經卷一 || 序品第一、方便品第二

妙法蓮華經卷二 || 譬喻品第三、信解品第四

妙法蓮華經卷三 || 藥草喻品第五、授記品第六、化城喻品第七

妙法蓮華經卷四 || 五百弟子受記品第八、授學無學人記品第九、法師品第十、見宝塔品第十一

妙法蓮華經卷五 || 提婆達多品第十二、勸持品第十三、安樂行品第十四、從地涌出品第十五

妙法蓮華經卷六 || 如來壽量品第十六、分別功德品第十七、隨喜功德品第十八、法師功德品第十九

妙法蓮華經卷七 || 常不輕菩薩品第二十、如來神力品第二十一、囑累品第二十二、藥王菩薩本事品第二十三、

妙音菩薩品第二十四

妙法蓮華經卷八 || 觀世音菩薩普門品第二十五、陀羅尼品第二十六、妙莊嚴王本事品第二十七、普賢菩薩勸

發品第二十八

仏説觀普賢菩薩行法經（結經）

次に品々の大意を、おおむね妙法蓮華經並開結（日蓮正宗第六十六世日達上人編）によって概略説明する。

序品第一 じよほん

序品は、通じては法華經全体の序分であり、別しては迹門十四品の序分であるから、通序と別序とに分けることができる。

通序とは諸經に通じているところの序分のこと、必ず「如是我聞」の句が最初にあり、それから「一時」「仏」が「どこ」で「誰」と共にいたというふうに書かれるのである。

この序品の通序は、信・聞・時・主・処・衆の六成就からなり、別序はこの經にかぎる序分であって、集衆・現瑞・疑念・發問・答問の五序から成り立っている。

まず、現瑞序では、この土の六瑞（説法・入定・雨華・地動・衆喜・放光）を現じ、その放光瑞で、東方万八千土を照らすことによって、他の土の六瑞を現じて、仏の化導の甚深であることを示している。

そこで、現瑞を縁として、弥勒菩薩が衆の代表としての問いを發し、それに文殊師利菩薩が惟付（思考）して答えるのである。

その答中に、過去無量無辺不可思議阿僧祇劫という、久遠における日月燈明仏の説法化導を示して、いまの釈迦仏の現瑞の相が、燈明仏の現瑞と同じであることを説くのである。

この序品で、すでに本門の久遠実成の由来を、ひそかに説き示しているのである。

方便品第二 ほうべんほん

方便品は、十方仏土のなかには唯一仏乗の教法のみであることを説いたのである。まず方便という語を、天台大師は三義に解釈している。

第一を法用方便という。衆生教化の方法として、衆生の機根に応じ、衆生の好むところに随って説法をし、

眞実の門に誘引する用をなし、利益をなすことをいう。すなわち声聞乗の人には四諦の法を説き、縁覺乗の人には十二因縁の法を説き、菩薩乗の人には六度の法を説いたようなのは、教化の方法が人々の機根に相應しておのおの功用利益をしたから、これを方便説といい、一般に通ずる義である。

第二を能通方便といい、方便とは眞実に対する語で眞実に入る門との意である。法師品の「方便の門を開いて眞実の相を示す」の文からとったのである。

これはなんのために方便の法を説くのかというと、別に眞実の理があつて、それへ入らせる門戸になるという方便の性質を示したものである。これも一般に通ずる義である。

以上の二つは、方便品に「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」と説かれている方便の教えで、四十二年間に説かれた阿彌陀經、大日經、蘇悉地經等の權教で説かれているもので、現在では用いない。

第三を秘妙方便といい、爾前經において、三乗即一乘法なることを秘して明かさなかつたのを秘方といい、その秘方をいま打ち明けて三乗即一乘法なりと顯わしたのが妙であり、妙を便と名づけるのである。秘方とは三乘法をいい、三乘法がすなわち一乘法であることを妙便というのである。これによって、この經が方便品と名づけられ、またこれが法華經に限る方便の義釈でもある。

また、秘とは仏と仏のみが知っていること、妙とは衆生の思議しがたい境涯をいう。末法の衆生は種々の悩みや、凡夫そのままの愚かな境涯に住んでいるが、その身そのままが久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷属であり、仏なのだと思ふことが、秘妙方便である。

そして、法用、能通の義による一乘法とは別の三乘法を方便という。

すなわち法華以前の方便は体外たいげの方便といい、一乘法と同体の三乘法を体内たいないの方便であるという。法華經の方便は、体内の方便というのである。

これまで、三乘法即一乘法であることを秘していたのを打ち明けて、三乗即一乗なりと顯あらわすのを、開三顯かいさんけん一いちとも開權顯實とも開顯かいけんとも開會かいえともいいうのである。

この經の所詮しよせんを要約すると、教行人理きようぎょうにんりの四一開會であつて、

教に約すれば、三乗即一乗であり、

行に約すれば、汝等所行是菩薩道であり、

人に約すれば、二乗作仏であり、

理に約すれば、諸法実相四仏知見であり、

この四一について、顯一を説くのである。

そして、開三顯一については、まず略開三顯一りやくかいさんけんいつと広開三顯一こうかいさんけんいつとの二つに分けられ、略開三顯一は十如是じゅうにょぜの文

であつて、いわゆる一念三千の法門は、これから出ているのである。

釈尊は、五千の衆が礼仏らいぶつ而退にたいの後、純有貞實じゆんぬじやうじつの衆のみであるのを見て、「増上慢ぞうじやうまんの人、退しりぞくも亦佳またよし」とし

て広開三顯一を説かれ、三周の説法がある。方便品は、そのうち法説周ほつせつしゆうの正説の段にあたる。

法華經迹門しやくもんでは、法説周ほつせつ、譬説周ひせつ、因縁周いんねんの三周の聲聞が成仏じやうぶつを許ゆるされ、それぞれ正説、領解りやうげ、述成、授記

が説かれている。

三周の聲聞に対する説法を図示すると次のようになる。

略開三顛一

方便品第二

法説周

正説
領解
述成
授記

譬喩品第三

広開三顛一

譬説周

正説
領解
述成
授記

信解品第四

藥草喩品第五

授記品第六

因縁周

正説
領解
述成
授記

化城喩品第七

五百弟子受記品第八

授学無学人記品第九

その化導の方法は五仏ごぶつ（十方諸仏、過去仏、未来仏、現在仏、釈迦仏）同道であることを示し、必ず三乗をもつて衆生の機根を調熟じょうじゅくし、最後に一乗の究竟法くきやうほうを説いて、仏の出世の功德の終わりを示しているのである。

譬喩品は三周の説法のうち喩説周ゆせつしゅうである。

譬喩品第三

迹門正宗分のうち、広開三顛一は、三周の説法で始終するのである。その法説周においての正

説は、方便品で説かれるが、この時、上根の舍利弗一人が、諸法実相の妙理を悟って、そして、三乗を開いて一乗を顕わすことが成仏の法であることを領解し、その舍利弗の領解に対して、釈尊が承認して、さらに相違のないことを述べ、そして舍利弗の劫・国・名号を説いて未来成仏の保証を与え、そこで一座の四衆八部が歓喜して、法説周の一段の法門は終わるのである。

そこで舍利弗は、他の声聞が未領解であるから、釈尊に向かって詳説を請い、爾時舍利弗白言世尊から始まって、釈尊は、三車火宅の譬喩を説かれるので、これが、この品の譬説周の正説段をなすのである。

この三車火宅の譬えによって、三車三乗の権を開し、一車一乗、すなわち大白牛車の実を顕わすのである。なお、この品には「若し人信ぜずして、此の経を毀謗せば……其の人命終して阿鼻獄に入らん」と戒められ、憍慢、懈怠、計我、浅識、著欲、不解、不信、鬺蹙、疑惑、誹謗、輕善、憎善、嫉善、恨善の十四誹謗が説かれている。

信解品第四

この品は、譬説周のなかの領解段であって、釈尊が前品で三車火宅の譬えをもって、開三顯一の旨を説かれたので、須菩提、迦旃延、迦葉、目連の四大声聞が、初めてその旨を領解し、長者窮子の譬えを説いて領解の旨を述べたのである。

長者窮子の譬えでは、巧みに種熟脱の三時を五時にわたって説いて領解のままを述べて説いている。

一には、父子相失は、大通智勝仏の時の下種から中間、退大取小を譬え、

二には、父子相見は、熟益、今番出世の仏による華嚴の擬宜に譬え、

三には、父命追誘は、阿含、方等の誘引、彈呵を譬え、

四には、領知家業は、般若淘汰を譬え、

五には、正付家業は、正しく法華の開會、脱益を譬えたものであつて、

そして、最後に、仏恩の廣大甚深を贊嘆して終わるのである。

藥草喩品第五

前の信解品において、四大声聞が三車一乘の譬えを聞いて、三乘方便一乘真實の旨を知り、これを長者窮子の譬えをもつて領解したのであるが、さらに一步を進め、教は本来一相一味であるけれども、衆生の機根に随つて、三乘五乘の別をなしていることを、十分に解していないので、釈尊は「一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し」と三草二木の譬え（雲雨藥草の喩）を説いて、実相一味の法が、機によつて三乘五乘と分かれることを示した。

すなわち、釈尊が、四大声聞の領解を述成したところであるから、所潤の藥草を取つて藥草喩品と名づけられるのである。

五乘七方便は、共に差別の利益をこうむるものであるが、一地の所生、一雨の所潤であることを説いているのであるから、結局は差別の五乘七方便は、ただちに仏智の一仏性に開會せられて、無差別の仏海に歸入することを知らせるので、すべて仏の善巧方便であることを教えられているのである。

授記品第六

授は与える義、受は得くる義、記は事を記すということであつて、すなわち成仏の事を記すので、仏意によれば授記、機情によれば受記で、いずれを書いてもさしつかえない。また、行因、得果、劫國、仏壽、正像、國淨の六事を分別するので、記別ともいう。

この品では、四大声聞の当來成仏の事を六事に分別するので、記別であり、また仏意にまかせて授記品とい

うのである。そして授記については、爾前經にも菩薩、善人、男、人天の授記はあるが、二乗、惡人、女人、畜生の授記は、法華經獨特であるから、法華經にかぎり二乗作仏というのである。

この品で中根のための譬説周は終わり、最後の二頌半の偈頌に下根の聲聞のために「宿世の因縁、吾れ今当に説くべし、汝等善く聴け」と宿世の因縁を説いて開悟せしめようと、次の化城喩品を説くことになるのである。

化城喩品第七

この品は、法華三周のなかの、第三因縁周の正説を説いたものである。

法説・譬説の二周ではまだ領解しない下根の聲聞のために、久遠以来の師弟の宿世の因縁を説いて、ついに得道させるのである。

まず、前段に、三千塵点劫の久遠における大通智勝仏の出世成道を説き、十六王子の請いによって半満権実の法輪を転じ、ついに法華經を説いて出世の本懷を遂げて入定し、次に十六王子が法華經を覆講して大衆に結縁するのである。

次に後段では、この因縁を譬喩として説くために、化城の譬喩を説かれて、二乗の涅槃は、化城のようなもので真実ではなく、「宝処は近きに在り、此の城は実に非ず。我が化作ならくのみ」であると説き、「仏道は長遠なり。久しく勤苦を受けて、乃し成ずることを得べし」と説かれるのである。化城は三乗であり、宝処は一仏乗の譬えである。

五百弟子受記品第八

この品と次の授学無学人記品の二つは、因縁周の授記段である。

因縁周でも領解、述成の二段はあるが、前の譬説周の領解段（信解品）、述成段（薬草喩品）のように長くないので、これを授記中に摂したのである。

この品は、まず最初に、下根の声聞を代表して富樓那の默然領解があり、釈尊は富樓那の過去の修行が満足したことを明かし、法明如来の記別を授け、次いで、千二百人にしだいに授記したが、別して阿若憍陳如、優樓頻伽迦葉をはじめ莎伽陀（須利槃特）などの五百人に、普明如来の同一名号で同時に授記したのである。次に釈尊は、迦葉を通じて、この会にいない一切の声聞にも、授記を説かれた。授記を得た五百の声聞は、歡喜踊躍して貧人繫珠の譬え（衣裏珠の譬えともいう）を述べて、仏恩の深重を得解したのである。

授学無学人記品第九

この品もまた、下根の阿難、羅睺羅をはじめとして学無学の二千の授記を明かすのである。

学とは、まだ惑を断じ尽くさず、まさに真理を修学している者、すなわち四果の聖者のなかの前三果（預流、一來、不還の三果）の人をさす。無学とは、惑を断じ尽くして、このうゑに学ぶ必要のない者、すなわち阿羅漢果の人のことである。

まず、阿難に山海慧自在通王仏、羅睺羅に蹈七宝華仏の記別を与え、さらに学無学二千人は同類同性の人々であるから、同一名号の宝相如来の記別を授けられたのである。

そこで、学無学二千人と称して別に一品を設けて、授学無学人記品としたのである。

この品から安樂行品までの五品は、迹門の流通分で、在世の人々のみでなく、来世の人々をも利益する説法である。

法師品第十

次の宝塔品と共に、釈尊みずから弘經の功德深重を説いて、流通を勧められているのである。

特にこの品では、この經の弘通を勧導して末法の弘經の人法と、弘經の方軌を示されている。

法師とは、妙法を弘通する大師で、五種の人がよく妙法を弘通するのである。

五種とは受持、読、誦、解説、書写で、この五種をもって妙法蓮華經を弘通するのが五種法師であって、続いて華香、瓔珞、抹香、塗香、焼香、繒蓋、幢幡、衣服、伎樂、合掌の十種供養を合わせ説かれている。

そして「末法において、一人のためにも妙法蓮華經を説く者は、如来の使なり、如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と示されている。

次いで所持の法を、法、人、処、因、果に約して歎美し、高原穿鑿の譬えを説かれ、弘經の方軌に、衣、座、室の三軌を「藥王、若し善男子、善女人有って、如来の滅後に、四衆の為に是の法華經を説かんと欲せば、云何が応に説くべき。是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の經を説くべし。如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是なり。如来の座とは一切法空是れなり。是の中に安住して、然して後に、不懈怠の心を以って、諸の菩薩、及び四衆の為に、広く是の法華經を説くべし」と説かれている。

見宝塔品第十一

前品と同じく弘經の功德深重を説いて流通を勧めるうち、七宝の塔が大地から涌出して虚空に住するのを人々が見るから、見宝塔品と題するのである。

まず、宝塔の中から大音聲があつて、皆これ眞実と称歎したのに、人々は驚き、大衆説菩薩は何の因縁によつて「塔有り、涌出し、音聲を發す」の三問をすれば、すなわち釈尊から三答があつた。

続いて、十方分身を召し、三變土田のことがあつて、二仏並座し、仏は神通力をもつて人々を虚空に置き、大音聲に唱募し「付属の時至る（当に涅槃に入るべし）、付属して在る有り」と三箇の鳳詔をなし、後の上行

などが涌出する伏線をなしている。

また、品末には、六難九易なんくいを示して流通を勧めているのである。

この品では、多宝塔の出現に、証前しょうぜん起後の深旨があるのである。証前とは、塔中たうちゅうから多宝如来が大音声をもつて「釈迦牟尼世尊、所説の如きは皆是れ真実」と、なおこれを証したことからいい、また起後とは後の本門寿量品を起こすための遠序おんじよである。

この品から嘱累品ぞくゑいまでの十二品は、虚空で説かれたから虚空会こくうえといい、前後の靈山会りょうぜんえと並べて二処三会ふたところさんかいというのである。

提婆達多品第十二

この品は、前の法師品と見宝塔品が功德の深重をあげて流通を勧めたのに対して、かつての提婆の弘経と、釈尊の成道の両方を兼ね益した前例を引いて、功德の深重を証し流通を勧めるのである。

まず、前段に国王と阿私仙人あしせんじんの昔の話をあげ、釈尊が「果このみを採り水を汲み薪まきを拾い食を設け」て千年間給仕するところの苦行のありさまを説いている。その阿私仙人は、いまの提婆達多である。この大権たいこんの聖者が、業ごう因感果いんかんかの理を示すために自ら五逆の姿を示し、現身に地獄に落ちたが、妙法の功力によって、天王如来の記別を受けたのである。

次に、智積菩薩ちしやくの問いによって文殊菩薩の海中の弘経のありさまを説き、これによって八歳の竜女の成仏を説き、さらに舍利弗しゃりほつの疑問によって即身成仏を示すのである。

迹門しやくもんの正宗分八品では声聞の作仏の得記を明かし、流通分にはいって法師品は善人成仏を明かしたのに対し

て、この品では悪人と女人の成仏を説き、宝塔品では釈迦多宝の二仏並座は、一切衆生の色身が本有の境智を顕わしているのです、すなわち理性の即身成仏を説いたのであるが、この品では地獄の提婆達多と、海中から出た畜生である竜女の成仏を説いたのであるから、事相の即身成仏を説かれたのである。

勸持品第十三

この品は前々品の宝塔品の三箇の鳳詔によって、命に応じて、二万の菩薩は此土に、五百の阿羅漢、八千の学無学および六千の比丘尼などは他土に弘經することを誓願するのである。しかし、釈尊は、默然として八十億那由他の菩薩を見て弘經を勧め、これらの菩薩は十方世界の弘通を發誓して、釈尊の守護を乞うのである。また、偈文を説いて、如来滅後の三類の強敵はあるけれども、衣・座・室の弘經の三軌によって「我不愛身命、但惜無上道」の誓言を發したことを説いたものである。

安樂行品第十四

この品は法華經四要品の一つで、方便品の理によってこの安樂行を修し、後の寿量品の仏果を感じるものであつて、普門品ではその働きを述べるのである。

前品では、深行の菩薩が弘經の甚難を歎じ、五百および八千の声聞が娑婆を恐れて他土の弘經を誓うようなものであるから、文殊菩薩は、浅行初心の行者が濁惡世で安樂に妙法蓮華經を修行する方法を問ひ、釈尊はこれに對して、身・口・意・誓願の四種の安樂行を説き、初心の人はこれに住して妙法蓮華經を弘通し修行することを示されたのである。その相は、止（定）と觀（慧）と慈悲との三法をもつて、身・口・意・誓願の四行を導くから四安樂行というのである。

一に身安樂行とは、止に住するゆえに身の十惱乱を離れ、觀に住するゆえに一切法が空であり、如実相であり、無所有性であることがわかるからそれらに著せず、慈悲に住するゆえに礼拝行道など、一切の威儀ことごと

とく利他のためにすることである。

二に口安樂行とは、止に住するゆえ、不說過、不輕慢、不歎毀、不怨嫌であり、觀のゆえに但說大乘であり慈悲に住するゆえに読經し、仏を贊嘆し、自然に利他するをいうのである。

三に意安樂行とは、止に住するゆえに、散乱惡想を離れ、觀に住するゆえに、如来、菩薩、十方の菩薩、一切衆生の四人に四觀あり、慈悲に住するゆえに所修の禪定、智慧ことごとく一切衆生のためにすることである。

四に誓願安樂行とは、止に住するゆえに、怨親平等であり、觀に住するゆえに、所對の衆生に無著であり、慈悲に住するゆえに一切衆生において、拔苦與樂の誓願を發することである。法師品の衣・座・室の三軌と、この品の四安樂行とは、互いに弘經の方軌の表裏をなすのである。

なお、四安樂行を説いた後、譬中明珠の喩えを説き、經の妙を歎じて「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸經中に於いて、最も其の上に在り」と説かれているのである。

從地涌出品第十五

この品から經末までの十四品が本門で、開近顯遠をもつて大意としている。

本門のなかにも、また序・正・流通の三段があり、この品の初めから「汝等自ら當に是れに因つて聞くことを得べし」までは本門の序分であつて、次の「爾の時、釈迦牟尼仏、弥勒菩薩に告げたまわく」からの半品と寿量品および分別功德品の十九行の偈の終わり「一切の善根を具して以て無上の心を助く」までは正宗分で、次の「現在の四信の爾の時、仏、弥勒菩薩摩訶薩に告げたまわく」から經末までが流通分となっているのである。

この品の前半では、他方來の迹化の八恒河沙の大菩薩が、此土娑婆世界の弘經を請うたけれども、釈尊は許

さないで、迹門の大地を破つて、上行などの四菩薩を上首とした本眷属六万恒河沙の菩薩衆を召して涌出させるのである。

下方涌出の菩薩は三十二相を具し、しかも多数であることに、此土の菩薩は疑念を起こし、弥勒菩薩が請を結び、なお他土の無量の菩薩も疑念を生じ、十方分身の諸仏がおさえて、本門の涌出序、疑念序を終わる。後半は、前の大衆の疑念を代表して弥勒が請うたので、いよいよ釈尊の遠寿を願わそうとした正宗分の小序ともいふべき誠許の一段がある。

そして、略開近顕遠を説き、動執生疑するのである。そのなかで、弥勒菩薩は「父少く子老ゆ」の喩えを説き「願わくは今、解説を為せ」と騰疑致請して、ついに寿量品が説かれることになるのである。

如来寿量品第十六

如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号である。別して本地三仏の別号である。寿量とは十方三世・二仏・三仏の諸仏の功德を詮量するので、寿量品とい

う。いまは正しく本地の三仏の功德を詮量するのである。

この品の一章こそ、釈尊出世の本懐、一切衆生成仏得道の真実義である。寿量品が説かれたことによって釈迦仏法はすべて完結するのである。寿量品は釈迦一代五十年の説法の完結編であり、生命であり、眼目である。日蓮大聖人いわく「一切経の中に此の寿量品ましまさずは天に日月無く国に大王なく山海に玉なく人にたましむ無からんがごとし、されば寿量品なくしては一切経いたづらごとなるべし」(寿量品得意抄二二二頁)と、この品の重要なことを説かれている。

前品で、弥勒菩薩が大衆を代表して疑念を釈尊に問うたので、まず、この品の初めに釈尊は「汝等当に如来

10
の誠諦じやうたいの語を信解すべし」と三誠せられたが、弥勒は大衆の上首となつて、「我等当に仏の語を信受したてまつる」と三請してやまなかつたので、釈尊はさらに重誠して「如来秘密神通之力にょらいひみつじんずうしりき」を説いて、広く開近顯遠かいこんけんのんし、断疑生信だんぎしやうしんするのである。

文は、法説と譬説と偈頌げじゆの三段に分けられるのであるが、法説では、三世常住の益物やくもつが中心となり、正しく五百塵点劫じふてんごうの久遠の本地を開顯して、「我実に成仏してより已来このかた、無量無辺百千万億那由佗劫なゆたごうなり」と説かれ、譬説では、良医の喩たとえを説かれ「擣錠和合とうしやわごう」の良薬を服せしめて、不失心者ふしつしんじやは病ことごとく除き愈えしめたが失本心の者には、是好良薬を今留在此せこうろうやく　こんるざいしして、遣使還告けんしげんこして、未来の益を説かれているのである。偈頌は、長行を重頌じゆうじゆしている自我偈じがけのことである。

しからば、文底の立ち場から如来寿量品を読めば、どうなるか。

日蓮大聖人は御義口伝下（七五二）にいわく「如来とは釈尊・惣そうじては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類たぐいの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」と。

同じく御義口伝下（七五三）にいわく「然りと雖も而も当品（如来寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計りばか当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云」と。

分別功德品第十七

この品は、略広に開近顯遠かいこんけんのんして、菩薩大衆は種々の功德を得たのであるが、その功德の浅深せんじん不同を分別することを説いたので、分別功德品というのである。

この品は二段に分かれていて、初めから弥勒が領解を述べた偈頌の終わりまでは、本門の正宗分で、そのなかに授記と領解とがあり、まず総じて菩薩に法身の記を授け、大衆の供養があり、次いで、領解、分別供養がある。

次に、後半、「爾の時、仏、弥勒菩薩摩訶薩に告げたまわく」から終わりまでは流通分に属し、次の品の終りまでは初品の因の功德を明かすのであって、まず一念信解、略解言趣、広為他說、深信觀成の現在の四信と、随喜品、読誦品、解説品、兼行六度品、正行六度品の滅後の五品を説き、次品の終りまでにもおよんでいる。日蓮大聖人は、南無妙法蓮華經の正行を、初信の位にとっておられる。

随喜功德品第十八

前品の流通からこの品の終りまでは、初品の因の功德を明かしている。前品は、初めから「当に知るべし、是れを深信解の相となづく」までは、現在の四信の行相と功德を明かし、それから終りまでは、滅後の五品の行相と後分の四品の功德を明かしており、この品は初めから終りまで初品の随喜品の因の功德を説いているのである。

随喜とは、事理に随順し、己れを喜び、人を喜ぶなりとして、釈尊の本地深遠の理性の常住を聞いて信順するのを理に順うといい、仏の三世益物の一切処に遍きを聞いて信順することを事に順うという。己れを喜ぶとは、諸法実相の理（述門）および久遠本地の事（本門）を聞いて信解するので歡喜を生じ、人を喜ぶとは、仏も衆生も無作三身を具したりと觀ずるをもって、一切衆生に正道を悟らせようとする大慈悲心を發することをいう。この品では、五十展転して相教えることを説き、その第五十番目の人の随喜をもって、その功德の大きさを説いているのである。

法師功德品第十九

流通分のなかの弘經の功德が深いことを明かしたなかで、初随喜品の因の功德を明かして流通を勧めることは、前品で説かれたから、この品では、初随喜品の、果の功德を明かして流通を勧めるのである。

すなわち、五種法師（受持・読・誦・解説・書写）が、おのおの、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）清淨しょうじようの功德を明かしたので、これは五品のなかの初品の随喜品（天台の觀行即）の人が、十信位（相似即）に上つて得られるところであるから、初品の果の功德を説くというのである。

この品は、総じては、六根の功德を明かし、八百、千二百とおのおの功德の数の異なりはあるけれども、結局は、六根の功德は、互いに円融えんゆうして功德の差別はないのである。また、別しては、おのおの清淨を得ることを説いている。

常不輕菩薩品第二十

流通分のなかで弘經の功德が深いことを明かしたなかの第三段、法華經を信じる者とじようふきようぼさつほん毀そしる者との罪福ざいふくを引いて証とし、流通を勧めるのである。

この品を常不輕菩薩品と称するのは、過去の常不輕菩薩の因縁を引いて説いているからである。不輕とは、身に不輕の行を立て、口に不輕の教えを述べるから、不輕というのである。この品は釈尊の本生譚ほんじようたんに事よせて、威音王いおんのうおうの滅後像法の法華經を受持した常不輕菩薩は六根清淨を得たものであることを説いて、今日の釈迦仏の滅後の受持の修行を勧めたのである。

前品では六根清淨の果の功德を明かしたが、この品では六根清淨の因の修行を説いた。すなわち六根清淨を得ようと思うならば、難に耐たえて一心に弘經すべきであることを教えたのである。

また、不^{きよう}輕^{りやう}輕^{きやう}毀^きの四衆は、千劫に阿鼻地獄で大苦悩を受くと説き、法華經の信毀罪福の果報を明らかに説いていのである。

なお「我^が深^{じん}敬^{きやう}汝^に等^ら、不^ふ敢^{かん}輕^{きやう}慢^{まん}、所^し以^い者^{しや}何^が、汝^に等^ら皆^{みな}行^{かう}菩^ぼ薩^{さつ}道^{どう}、当^{とう}得^{とく}作^{さく}仏^{ぶつ}」(我深く汝等を敬う、敢て輕慢せず、ゆえんはいかん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし)の文は、不輕の二十四字の法華經として有名である。

如来神力品第二十一

分別功德品の半品と、隨喜功德品、法師功德品、不輕品の三品半は功德流通を明かし、次の八品は付嘱流通を説くのである。付嘱流通とは、釈尊の付嘱によって經典の流通を勧めることである。

この品は、地涌の菩薩が、釈尊の勅命を受けて、弘經することを説いたのである。神力品と名づけるゆえんは、深法を付嘱するために十種の神力を現ずるからである。そして、結要勸持して、称歎付嘱、結要付嘱、勸奨付嘱、釈付嘱とし、結要付嘱に「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の藏、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於いて宣示顯説す」とあり、これを天台大師は、五重玄の依文とし、日蓮大聖人は三大秘法の依文とせられたのである。

嘱累品第二十二

この品は、一切の菩薩に如来が摩頂付嘱することを明かすのである。嘱累とは、諸菩薩を累わして、弘經を嘱託することである。

諸菩薩は付嘱を受けて「世尊の勅の如く当に具さに奉行すべし」と三誓して付嘱のことが終わって、諸の分身仏をおのおの本土に還らせて、多宝仏の塔を閉じて元のようにしたのである。

やくおうぼ さつほんじ ほん
藥王菩薩本事品第二十三

この品からの五品は、付嘱流通のなかの化他流通である。

この品は弘法の師を勗めるのであって、宿王華菩薩の問いに対し、釈尊は日月淨明徳如来の本事と、その仏から付嘱を受けた藥王菩薩の本事を説いたのであるから、藥王菩薩本事品というのである。

文中に藥王菩薩が苦行して色身三昧を得、報恩に焼身供養したことを説いてある。ここで諸仏の同賛があり「善い哉、善い哉、善男子、是れ眞の精進なり、是れを眞の法をもって如来を供養すと名づく」と説かれた。後段では藥王品十喩の譬えを説かれ、さらに、有名な「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布す」の文がある。

みょうおんぼさつほん
妙音菩薩品第二十四

この品と次の觀世音菩薩普門品とは、化他流通中の受法の弟子を勗めるために説いたものである。

妙音菩薩の名は、この菩薩が淨光莊嚴国、淨華宿王智如来のもとから、この娑婆世界に來至する時「經る所の諸国六種に震動して、皆悉く七宝の蓮華をふらし、百千の天樂、鼓せざるに自ら鳴る」とあり、それはこの菩薩が過去に十万種の伎樂を仏に供養し、八万四千の宝鉢を奉った因縁によつて、いまは淨華宿王智仏の国に生まれて種々の神力があるからである。この品は、妙音菩薩の三十四身普門示現のことを説いているので、この品名があるのである。

この品では、妙音菩薩は、身を六道に分けて一乗を弘宣するので、身に定形がない。これは滅後に衆生の仏道を修するところの一切の人法に対して、輕賤の思を生ずべからずと受法の弟子を戒め、さらに法華經を行

ずる者は、普現色身三昧を成ずることができると、教えられているのである。

観世音菩薩普門品第二十五

この品は、昔から法華四要品の一つとされていて、寿量品の仏が、不思議の化用を垂れて衆生を済度することを説いている。すなわち観世音菩薩が、三

十三身の普門示現の妙用を垂れて、衆生を済度することを説くので、化他流通中の前品妙音品と共に、受法の弟子を戒めるために説いたのである。

観世音菩薩は、この土に因縁が厚いとされているので、法華經中ではこの一品が、特に別行して、観音經と称せられて、古来から多くの人によって読誦せられたのである。しかるに、日蓮大聖人は、御義口伝下（七七六）にいわく「今末法に入って日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は観音の利益より天地雲泥せり、……観音既に法華經を頂受せり然らば此の經受持の行者は観世音の利益より勝れたり云云」と。

この品名については、観世音とは人であり、普門は法であり、これについて前後二番の問答をもって説いているからである。それには、観世音とは化他についての名であるとし、衆生の三業の善を生ぜしめるために、一に観世音、二に觀世意、三に觀世身と説いて、口業に他の二業を摂して、觀世音と称したのである。また普門とは現身說法の妙用をさして普門というのである。

この品では、三十三身十九説法を説いて供養を勧めたのに対して、無尽意菩薩は頸に繫げた宝珠の瓔珞を与えたが、観世音菩薩は受けようとしなかったけれども、釈尊の勧めによって、これを受け、この瓔珞を二分して、釈尊と多宝仏塔に奉ったことが説かれている。このことは、觀世音は菩薩であるから、無上世尊であるところの二仏に廻施して、施者の福をますます大ならしめることになるのである。

陀羅尼品第二十六

この品は、化他流通中、惡世の弘經者に對して、神呪を説いて守護し、弘通させることを説いたのである。

陀羅尼とは梵語で總持と翻譯する。總は總攝の義、持は任持の義で、一字の中に無量の義を總攝し、一義の中に一切の義を任持するの意である。陀羅尼はよく惡を遮し、よく善を持するのである。呪をもって護るのに五段がある。すなわち、藥王菩薩、勇施菩薩、毘沙門天王、持国天王、十羅刹女の五番の神呪である。

妙莊嚴王本事品第二十七

前品は呪（法）をもって、末世弘經の師を守るのに對して、この品は化他流通中の人をもつて法を守るを説き明かしたのである。

人とは淨德夫人と淨藏・淨眼の二子をさす。この三人相寄つて外道邪見の父・妙莊嚴王を正法に転入帰正させることを説いたので、これは人をもつて法を守ることを示したものである。

品末では、淨藏・淨眼の二子を「今の藥王菩薩、藥上菩薩、これなり」と明かしているのであるから、藥王・藥上菩薩の本事品とも見られるのである。

普賢菩薩勸発品第二十八

この品は、神力品以下の付嘱流通中の自行流通を勧めるのである。

普賢菩薩が、東方宝威徳上王仏の国にいて、この娑婆世界で、釈尊が法華經を説くのを聞いて来至し、釈尊に仏の滅後にこの法華經をいかにしてたもつべきであるかと問うたのに對して、釈尊は、一に諸仏に護念せられ、二に諸の徳本を植え、三に正定聚に入り、四に一切衆生を救う心を起すべしとの四法成就を説いて、法華經を再演したことを表わしているのである。

そこで、普賢菩薩は誓願を立てて、後五百歳の濁惡世に法華經を受持する行者を守護し、惡魔、魔民、鳩槃

茶などの怖れを防ぎ、しかももしは行き、もしは立ってこの経を読誦すれば、自ら六牙の白象王に乗って、その人を供養して守護し、または示教利喜し、なおまた、陀羅尼呪を説いて、持経者を守護することを誓い、法を守ることを誓い、すなわち人法守護を誓っているのである。この普賢菩薩の方からいえば、この品は化他の流通となるのであるが、法華三昧を修行する行者についていうなら、自行流通となるのである。

このようにして、法華經の説法がまったく終わったので、菩薩、声聞、天、竜、人非人などの一切の一会の大衆は歡喜して、仏語を受持して去ったのである。

無量義經

中国南北朝時代の齊、この齊は、周末戰国時代の齊と區別するために、その国王の姓の蕭を取って蕭齊というが、無量義經はその蕭齊の時代に兗州の朝廷寺にいた中天竺の人、曇摩迦陀耶舎によつて翻訳されたのであつて、羅什三藏より約百年の後の翻訳といわれている。

この經の説處は、その經文に「一時、仏、王舍城耆闍崛山の中に住したまい、大比丘衆万二千と俱なりき」とあるから、法華經と同じく靈鷲山において説かれたことは明らかである。

この經の説時は、法華經の序品に「諸の菩薩の為に大乘經の無量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう、仏、此の經を説き已つて結跏趺坐し無量義處三昧に入つて、身心動じたまわず」とあり、この三昧より安詳として起つて、方便品を説かれたのであつて、無量義經説法品に「仏の言わく、善男子是の一の法門をば名づけて無量義と為す」とあるから、この無量義經は法華經の直前に説かれたことがわかる。

なお、説法品に「無量義とは一法より生ず」と説かれ、この一法より無量の義を生ずるのであるが、この一法とは何かということは、明確に説かれていない。この一法こそ、次の法華經において説かれる妙法蓮華經で

ある。そこで、この無量義經は、法華經の序分であるということがいえるのである。

日蓮大聖人は、御義口伝下（七八五頁）に「法華經八卷は処なり無量義經は無量義なり、無量義は三諦・三觀・三身・三乘・三業なり法華經に於一仏乘・分別說三と説いて法華の為の序分と成るなり」と、また「法華の為の序分開經なり」と説かれている。

このように、無量義經は法華經の序分で、開經として大切な經であり、徳行品、説法品、十功德品の一卷三品の經である。

徳行品第一

この經は、徳行品、説法品、十功德品の三品に分けられているが、通じて序分、正宗分、流通分の三分品とすることができ。

この徳行品は、つまり、この經の序分である。この經を説く釈迦牟尼仏は、いかに立派な仏であるかをたたえているので、そのたたえる人は普通の人々でなく、菩薩や大比丘である。その菩薩は、戒、定、慧、解脱、解脱知見等の立派な徳が具わり、しかも、不思議の徳によって立派な働きをなす大菩薩であり、大比丘は眞實にあらゆる迷いや苦しみを離れた人々である。それらの大菩薩は文殊師利菩薩等、大比丘は舍利弗等であり、それらの人々が集まって大莊嚴菩薩が、代表して、偈文をもって釈迦牟尼仏を賛嘆しているのである。かかる立派な菩薩や大比丘が賛嘆する仏はいかに立派であるかを示し、それによって、その仏の説法がいかに立派で、ありがたいかを表わしているのである。

偈文においては、仏の法身、色身、報身、応身の四身にわたってたたえて、最後の文に仏が一切衆生を救う

ために難行苦行し、精進を重ねたのは、大慈悲のゆえである。それゆえに「能く諸の勤め難きを勤めたまえるに帰依したてまつる」と帰依を表わしている。

説法品第二

この品は、この経の正説で、大莊嚴菩薩および八万の菩薩が仏を賛嘆する偈文を述べ終わってから、釈尊は、自分は久しからず涅槃に入る、もし疑問があるなら問うべしといったところ、大莊嚴菩薩および八万の菩薩は「疾かに無上正覺を成ずるには何等の法門を修行すべきか」を問うた。

釈尊は「一法門有り」と答えたところ、菩薩たちは「この法門とは何か、その意義は何か、そして、それをどう修行すべきか」と三点をあげて質問した。釈尊はこの質問に答えた。それがこの説法品である。

初めに「この一の法門を名づけて無量義と為す」と説き、「無量義とは、一法より生ず、その一法とは即ち無相なり」と説き明かしているが、結局は一法は実相であって、「仏眼を以って一切諸法を觀するに、宣説すべからず、所以はいかん、諸の衆生の性欲不同なることを知れり、性欲不同なれば種種に法を説き、種種に法を説くこと方便力を以ってす、四十余年には未だ真実を顯わさず」と有名な句を説いており、実相の一法は、この経でもついに明らかに説かず、法華經へはいつて初めて説いたのである。

この品には「方等十二部經、摩訶般若、華嚴海空を説いて、菩薩の歷劫修行を宣説す」とも説かれて、爾前の諸大乘經は歷劫修行しなければならぬことを示されていることも、注意しなければならない。

十功德品第三

この品は、この無量義經を修行していかなる利益があるかを説いたので、いわゆるこの経の流通分にあたる

のである。

大莊嚴菩薩が「此の微妙甚深無上大乗無量義經を説きたもう。眞実甚深であるから、もし人々が、この經を聞けば、大利益があり、そして修行すれば早く無上正覺を成ずることが出来る。このように、この經は不思議であるから、もっと広く人々のために甚深不思議の事を演べたまえ」と申したので、釈尊は、在世にもあれ、滅後にもあれ、この經を受持、読、誦、解説、書写、如説修行すれば、十不思議功德があると、第一より第十までの不思議の功德があることを説いたのである。

かくのごとく無量義經は法華經の開經序分であることは明白であつて、五重三段の第二・第三重に、無量義經が序分におかれているが、御義口伝下（七九四頁）に「妙法の序分無量義經なれば十界悉く妙法蓮華經の序分なり」とあつて、第五重、文底三段からみるときは、無量義經のみならず一切經ごとく妙法蓮華經の序分となるのである。

観普賢菩薩行法經

観普賢菩薩行法經は、中国南北朝時代の初期における宋の国、この宋は後の宋と區別するために、その国王が劉の姓であつたので名を取つて劉宋という、その劉宋の時代に觀

賓國（加溼弥羅國Ⅱ現今のインド Kashmir 地方）の人、曇無密多によつて、漢文に翻訳されたのであつて、いまより約千五百年以前であるといわれる。

この經の説所は、その經文に「一時、仏、毗舍離國、大林精舍、重閣講堂に在して、諸の比丘に告げたまわく」とあることから、毗舍離國（中インド十六大国の一つで摩伽陀國の北方といわれる）の大林精舍での説法と知ることが出来る。

また、この經の説時は、同じく經文中に「広く説くこと妙法華經の如し」とも、「大乘方等經を誦習するを以つての故に、即ち夢中に於いて、釈迦牟尼仏、諸の大衆と耆闍崛山に在して、法華經を説き一実の義を演べたもうを見ん」と、また「耆闍崛山を見るに、……此の光の至る処の十方分身の釈迦牟尼仏一時に雲のごとく集まり、広く妙法を説きたまうこと妙法華經の如し」等と説かれているのを見ると、この經は、法華經を説かれた後であることを知ることができる。

なお「却つて後三月あつて、我当に般涅槃すべし」と説かれてあるので、釈尊入滅の三月前の説法であると考えられる。

これらを総合するに、釈尊が靈鷲山で法華經を説かれてより、そこをたたれ、拘尸那城跋提河にいたる途中、毗舍離国、大林精舎で説かれた經であるということになるのである。

本經は一卷で、品を分かつてはいない。この經は通じて法華經の流通分である。

御義口伝下（七八五頁）に「依正の二法悉く法華經なりと結し納めたる經なれば此の普賢經を結經とは云うなり」とあるように、法華經の結經とされるのである。

一經中は、序・正・流通の三段に分かれている。

序分

まず尊者阿難、長老摩訶迦葉、弥勒菩薩摩訶薩の三大士は「却つて後三月あつて、我当に般涅槃すべし」と聞いたので、驚いて、釈尊に向かつて仏の入滅の後に「煩惱を断せず五欲を離れず」して、一乘真実の境涯に達するには、いかに修行すべきかを問うのである。

正宗分

釈尊は、これに答えて、大乘經典すなわち法華經を誦し、法華經を修し、法華經の意を發する者は、いまから自分の説く所を修せよとて、六根を清淨しじやうじやうにして法華經を誦せば、六牙ろくがの白象に乗る普賢菩薩を觀ずると説き（六牙とは六根清淨をあらわし、白象とは正しき道理を見つめて靜なるをあらわし、普賢菩薩は理をあらわすのであつて、これらのことは靜寂せいじやくなる正しき道理を意味するのである。つまり法華經で説く諸法実相をいうのである）普賢菩薩を觀ずるによつて、いっそう深く懺悔ざんげして釈迦牟尼仏、多宝仏塔、十方分身の諸仏を見ること、すなわち自ら仏身を成ずることを説かれているのである。

懺悔ざんげとは、普通に考えるところの改悛かいしゆんの情を現わすことだけではないのであつて、仏法でいう懺悔とは、仏の常住を信じ、自己の向上發展をはかり、成仏の境涯に達せんと努力することである。

その方法は、法華經を専心せんしんに誦誦じくじゆすることであると説かれている。

また、この經文中に、日蓮大聖人がしばしば引用になられる「仏の三種さんじゆの身は方等ほうとうより生ず。是れ大法印なり。涅槃海ねはんかいを印す。此の如き海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず」の文もある。

流通分

そこで、釈尊は、阿難に「大乘經を誦し、第一義甚深じんじんの空法を思わば、一彈指だんじの頃あいだに百万億阿僧祇劫あそうぎこうの生死の罪を除却じよきやくせん」と示され、懺悔のため受戒を説き、末法の自誓自戒を示され、最後に第一より第五にいたる五段の懺悔の法を教えて、滅後の四衆が、かくのごとき懺悔の法を修習すれば「久しからずして当に阿耨多羅三藐三菩提みやくぼだいを成ずべし」と説かれて、經文を終わっている。

【如是我聞】

「是の如きを、我聞きき」と読む。あらゆる經文の冒頭には、必ずこの一句がある。したがって、妙法蓮華經序品第一の冒頭にも、この一句がある。

序品は、通じては法華經の總序であり、別しては迹門十四品の序分であるから、通序、別序に分けることができる。通序は諸經に通じているところの序分のことである。

御義口伝上（七〇九頁）にいわく、

第一如是我聞の事。

文句の一に云く如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは能持の人なり記の一に云く故に始と末と一經を所聞の体と為す。

御義口伝に云く所聞は名字即なり法体とは南無妙法蓮華經なり能持とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一經の釈は始とは序品なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華經なり、伝教云く法華經を讚むると雖も還つて法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は如是我聞の聞には非ず法華經の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり、爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理會し順は即ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の類いを以て如是我聞の者と云う可きなり云云。

【迹門と本門】しやくもん ほんもん

迹しやくとは影という意味で、本体、実体に対する言葉。門もんとは真実に入る門、法門という意味である。

法華經二十八品のうち序品第一より安樂行品第十四までを迹門、涌出品第十五より勧発品第二十八までを本門という。迹門の肝心かんじんは方便品第二で、諸法実相に約して理の一念三千を説き、また二乗の作仏を説く。本門の肝心じゆりようほんは寿量品第十六にあり、久遠実成を説き顕あらわし、因果国いんがこくに約して事の一念三千を説き、そのうえで神力品において地涌の菩薩に法を結要付属している。釈迦は法華經の前十四品では、インド応誕おうたんの立場で理論上の実相觀を述べたのに対して、後の十四品では永遠の生命觀に立つて、事実の上から宇宙および生命の実相を述べているので、迹門と本門に立て分けられるのである。以上の点は諸御書にお示しのとおりである。

開目抄上（一九七頁） 此等の經經に二つの失とがあり、一には行布ぎょうふを存するが故に仍なお未だ權を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成しじようを言うが故に尚未なほだ迹を發せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨かうこつ・一切經の心髓しんずいなり（以上は爾前四十年の權經）、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顯本ほつしやくけんほんせざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるに似たり（以上は迹門十四品）、本門にいたりて始成正覺しじようしじようかくをやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって本門の十界の因果をとき顯す、此これ即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も

無始の九界に備りて・眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし(以上本門)。

文底秘沈抄(富要三卷七一) 迹門を理の一念三千と名づく是れは諸法実相に約して一念三千を明す故なり、弘の五の中に云く「既に諸法と云う故に実相即十なり既に実相と云う故に十即実相なり」云云……北峯に云く「諸法十界十如を出でず故に三千を成ず」云云、又本門を事の一念三千と名づくるは是れ因果国に約して一念三千を明す故なり、本尊抄に云く「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり、仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり、此れ即ち己心の三千具足の三種の世間なり」云云、此の文の中に因果国明らかなり、文句第十に云く「因果是れ深事」等云云。

そして迹門と本門には天地のような勝劣があるゆえに、御書には次のようにある。

治病大小権実違目(九九六) 法華經に又二經あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前(にぜん)と法華經との違目よりも猶相違あり爾前と迹門とは相違ありといへども相似(そうじ)の辺も有りぬべし、所説に八教あり爾前の円と迹門の円は相似(そうじ)せり爾前の仏と迹門の仏は劣(れつ)・勝(しょう)・報(ほう)・法(ほつ)身異れども始成(しじょう)の辺は同じきぞかし、今本門と迹門とは教主(すて)已に久始(くし)のかわりめ百歳のをきなと一歳の幼子のごとし、弟子又水火なり土の先後(しんご)いうばかりなし、而るを本迹を混合すれば水火を弁(わ)えざる者なり。

妙一女御返事(一二六一) 又法華經の弘(ひろ)まらせ給うべき時に二度有り所謂在世と末法となり、修行に又二意有り仏世は純円一実・滅後末法の今の時は一向本門の弘まらせ給うべき時なり、迹門の弘まらせ給うべき時は已に過ぎて二百余年になり、天台伝教こそ其の能弘(のうく)の人にてましまし候いしかどもそれもはや入滅し給いぬ、日蓮は今時を得たり豈此(あに)の所嘱(しよぞく)の本門を弘めざらんや、本迹二門は機も法も時も遙(はるか)に各別なり。

【三種の法華經】 さんしゆ ほ けきよう

法華經といへば、釈尊の説いた二十八品の法華經のみと思われているが、法華經にも次の三種がある。すなわち正法時代の法華經、像法時代の法華經、末法時代の法華經である。

仏法の流布には時が大切である。

釈尊滅後の千年間を正法、その後の千年間を像法、また釈尊滅後二千年以後を末法という。正法の時代は釈尊に縁の深い衆生がひじょうに多い時代であり、像法の時代の衆生は縁が浅い。そして末法の時代は、釈尊にはぜんぜん縁のない衆生ばかり生まれてくる。さらに釈尊の説いた仏法に少しの功德もなくなった時を末法というのである。

正法、像法の時代には釈迦仏法に利益があるが、末法の時代には釈尊の出世の本懐といわれる法華經二十八品にもまったく利益はなくなり、ただ末法の御本仏日蓮大聖人の仏法にのみ利益があるのである。

さて、正法の法華經とは、釈尊出世の本懐である法華經二十八品であり、像法の法華經とは、天台の説いた摩訶止観である。そして末法の法華經とは、末法の御本仏であられる日蓮大聖人の説かれた南無妙法蓮華經の七文字の法華經である。

したがって「日蓮宗」と名のりながら稲荷や鬼子母神や帝釈天などの謗法物と一緒に、末法の衆生に無縁の釈迦仏像などをまつるのは、大きな誤りといえよう。

法華經には七つの譬^{たと}えが説かれている。これを法華經の七譬^ひという。

三車火宅の譬^{たとえ}（譬^{たと}喩品第三に説かれる）これは長者が火宅に遊ぶ諸子を救うために、羊^{やぎ}・鹿^か・牛^{ぎう}の三車を与えることを約束し、火宅より救い出す。三車は三乗を意味し、後に与えた大白牛車は一仏乗に譬^{たと}える。

文底の意は、人生の目的は成仏にあり、大白牛車とは御本尊のことである。

長者窮子の譬^{たとえ}（信解品第四に説かれる）長者の子が、それを知らずに流浪^{ろうろう}し困窮^{こんきゆう}するが、長者の方便によつて長者の子であることを自覚する。これが、秘妙^{ひみょう}方便である。

文底の意では、われわれはもともと仏であり、罰をうけたり迷^{まよ}うことがあっても、退転なく信心していくなれば必ず成仏するという意である。

三草二木の譬^{たとえ}（または藥草の譬^{たと}え、藥草喩品第五に説かれる）三草とは人天・二乗・藏教の菩薩に譬^{たと}え、二木とは通教・別教の菩薩に譬^{たと}え、すべてが一地一雨すなわち一仏乗から生まれたことを説いた。

文底の意は、御本尊の功德は平等であり、人生の目的は成仏にあることを教える。

化城宝処の譬^{たとえ}（化城喩品第七に説かれる）三千塵点劫^{じんてんごう}の譬^{たと}えである。宝処に行くのに途中化城をもうけて引^ひ導^{どう}した。二乗を化城に、宝処を一仏乗に譬^{たと}えている。

文底の意では、宝処とは御本尊であり成仏である。

貧人繫珠の譬（または衣裏珠の譬え、五百弟子受記品第八に説かれる）貧人が親友より無価の宝珠をもらつたが、謗法の酒に酔っていたので、自分が宝珠を持っているのを知らなかった。これも秘妙方便の譬えである。

文底の意は、御本尊を信ずれば、われわれはもともと仏であることを知る。しかしながら謗法していることによつて、知ることができないとの意である。

譬中明珠の譬（または頂珠の譬え、安樂行品第十四に説かれる）ある大王が、最高の勇氣ある者に無上の宝である譬中の明珠を与えた。この明珠は法華經であると説く。

文底の意では、御本尊こそあらゆる宝に超越した明珠であり、大功德の根源である。

良医病子の譬（または譬如良医の譬え、如来寿量品第十六に説かれる）良医すなわち仏に三乗の病子があつて、他の毒藥、すなわち邪宗を信じて大不幸になる。このとき、良医の父が帰つてそれを救う。

文底の意では、良医とは御本仏日蓮大聖人、病子とは末法の衆生で、信ずる者も不信の者も共に救われるとの意である。

【開三頭一】

三とは声聞・緣覺・菩薩の三乗、一とは一仏乗、三乗を開いて一仏乗を顯わすということ。釈尊はインドで成道以来、四十二年にわたつて方便權教を説いてきたが、後八年の法華經を説くにあたり、その開經たる無量

義経には「四十余年には未だ真実を顕さず」と説き、次いで方便品には「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」と宣言している。すなわち方便品の説法は、四十余年にいまだかつて聞かざる大法であることが知られるのである。

方便品では十如実相を説き一念三千を明かしている。これによって、爾前経で各別に説いた空諦・仮諦・中諦も円融相即していると説く。

従來說いてきた権教は、実教のために説いてきたのであり、いまここに権を開いて実を示し、実を示すとき権を廢するのである。これが開三顯一であり、方便品に「一仏乘に於いて分別して三と説きたもう」「一乗の法のみ有り、二無く亦三無し、仏の方便の説をば除く」というのがこれである。

天台大師は三種の教相中、第一に根性の融不融の相を立てた。爾前経では衆生の根性が不融なるがゆえに声聞・縁覺・菩薩等と、その機根にしたがって説法の内容もバラバラであったが、法華経方便品にいたって根性は円融し、一切衆生の人生の目的は一仏乘にある、すなわち成仏することであることが明らかにされたのである。（釈迦一代五時繼図六五三頁参照）

【開示悟入】

方便品にある広開三顯一の文であり、その文は、

諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舍利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一

大事の因縁を以つての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舍利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以つての故に、世に出現したもうと為づく。

開示悟入の四仏知見は、衆生がもともと持っている仏界を開発することを示したもので、ゆえに開三頭一なるのである。知見とは仏界を知見・覚知すること、すなわち体得すること。開示悟入は仏の念願であり、その根本は三大秘法の御本尊になる。また信心によつてのみ開示悟入できるのである。

開示悟入については、御義口伝上（七一六頁）に開仏知見の開とは信心の異名であり、示仏知見の示とは南無妙法蓮華經を示し、悟仏知見の悟とは即身成仏と悟り、入仏知見の入とは悟る当体・直至道場となることなど詳細な解釈があり、また日常生活にあつても開示悟入の法則は重要な基準となるのである。

【三周の声聞】

法華經迹門で声聞の弟子が、次々と成仏を許されて授記を受ける。ただしこの声聞のなかにも、法理を聞いてすぐ悟れる上根の人もあれば、法理を聞いてもよくわからず、たとえ話や因縁話を聞いて初めてわかる中根、下根の人もいた。ゆえに同じ法華經の迹門を聞いても、悟りには前後がある。すなわち法説、譬喩説、因

縁説の三つの説法にしたがって、それぞれの法を聞いて得道したのである。これを三周の声聞という。まず舍利弗等は方便品の法説を聞いて授記を受ける。これを法説周ほつせつしゅうという。次に譬喩品等の譬え話を聞いて須菩提・迦旃延・迦葉・目連等が授記を受ける。これを喩説周ゆせつしゅう（譬喩説周）という。第三に化城喩品で大通智勝だいづうちしょう仏以来の因縁を聞いて富楼那・阿難をはじめ下根の声聞が授記を受ける。これを因縁周因いんねんしゅういん（縁説周）という。以上、三段階に分けられたのを三周の声聞というのである。

【一大事因縁いちだいじんねん】

法華經方便品に次のようにある。

所以ゆえんは何ん。諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以もつての故に、世に出現したもう。舍利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以もつての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄しやうじやうなるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう（開示悟入）。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以もつての故に、世に出現したもうと為なづく。

仏の出世の目的は開示悟入の一大事因縁のためであるということ。文底の立場からいえば、一大事因縁とは南無妙法蓮華經のことである。

日蓮大聖人は御義口伝上（七一六頁）に次のように仰せである。

御義口伝に云く一とは法華經なり大とは華嚴なり事とは中間の三昧なり、法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に非ざるが如し云云、又云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云、又云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華經の五字なり、此の大事を釈迦如来・四十余年の間隠密したもうなり今經の時説き出したもう此の大事を説かんが為に仏は出世したもう……又云く一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華經是なり、此の五字日蓮出世の本懷なり之を名けて事と為す。

また日寛上人は文底秘沈抄（富要三卷六九頁）で、一大事の文を三大秘法に読まれている。

一は謂く本門の本尊なり、是れ則ち一閻浮提第一の故なり、又閻浮提の中二無く亦三無し、是の故に一と云うなり、大は謂く本門の戒壇なり、旧より勝るなりと訓ず権迹の諸戒に勝るが故なり、又景勝の地を尋ねて建立するが故なり、事は謂く本門の題目なり、理に非ざるを事と曰う是れ天台の理行に非ざる故なり、又事を事に行ずるが故に事と言うなり。

【三變土田】

宝塔品で釈迦が三度国土を變じて浄土としたことをいう。土田とは国土・土地・場所の意味である。

宝塔品では多宝如来の宝塔が涌現し、釈迦がその塔を開こうとして、十方分身の諸仏を呼び集め坐らせるた

めに、まず白毫びやくこうの光りを放はなつて娑婆しやば世界を変じて清浄にし、諸もろもろの天人を他土に移し、さらに八方おのおの二百万億那由他なゆたの世界を変じて清浄にし、諸の天人を他土に移した。そしてそこへ十方分身の諸仏を集めて多宝の塔を開き、十方世界は通じて一仏土である相を現わした。これを三變土田または三變浄土という。

日寛上人は観心本尊抄文段下（富要四卷二五三頁）に「釈籤しやくせんの第七の意三變土田を以もつて正しく同居の浄に約し兼ねて実報方便となす故に、三變は同居の浄土方便実報なり」と説かれている。

同居とは凡聖同居土ぼんしょうど、すなわち娑婆世界のことで、釈迦が直接教化する国土のこと。方便とは方便有余土、すなわち方便道を修行して見思惑けんじわくを断じたが、まだ塵沙惑・無明惑むみょうわくを残している二乗、菩薩の住む国土のこと。実報じつぽうとは実報土で、菩薩のうちで中道を証得し、無明を断破したものが住む国土である。この三土を迹土といい、本仏の住处である寂光土を本土という。

宝塔品では三土を浄化して通じて一仏土にしたというが、本門にいたって本仏が顕あらわれおわれれば、ことごとく常寂光土となるのである。

【三千塵点劫さんぜんじんてんごうと五百塵点劫ごひやく】

三千塵点劫さんてんごうは化城喻品けじやうゆほん第七にある。

我過去世の、無量无边劫むりやうむへんごうを念おもうに、仏兩足尊りやうそくそん有あしき、大通智勝だいつうちしやうと名づく。人あつて力を以もつて、三千大千の土どを磨すつて、此の諸の地種を尽くして、皆悉ことごとく以もつて墨すみと為なして、千の国土を過ぎて、乃すなわち一の塵点を下さ

ん、是の如く展転し点して、此の諸の塵墨を尽くさんが如し、是の如き諸の国土の、点せると点せざると等を、復また尽ことごとく抹まして、塵と為なして一劫と為なん、此の諸の微塵の數に、其の劫復また是れに過ぎたり。

また五百塵点劫は如来寿量品第十六にある。

譬たとえば、五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界を、仮使人有たといあつて、抹まして微塵と為なして、東方五百千万億那由佗阿僧祇の国を過ぎて、乃すなわち一塵を下し、是の如く東に行きて是の微塵を尽さんが如き……是の諸の世界の、若もしは微塵を著おき、及び著かざる者を尽ことごとく以もつて塵と為なして、一塵を一劫とせん。我成仏してより已このかた来またこれ、復また此に過ぎたること百千万億那由佗阿僧祇劫なり。

以上のように迹門には化導の始まりを三千塵点劫と説き、本門には成仏を五百塵点劫の昔にありとして久遠くおん以来の師弟の關係を説き明かしている。しかして三千塵点劫は長い昔であつても、五百塵点劫に対すれば、昨日のようなものであり、また五百塵点劫といえども、久遠元初以来、本有常住ほんねじようじゆうの御本仏たる日蓮大聖人に対すれば、昨日のようなものである。

【記き小しょう久きゅう成じょう】

記小の小とは二乗、記とは授記のことで、迹門において二乗が釈迦から成仏の授記を授けられたことをいう。久成とは久遠実成のことで、本門寿量品で五百塵点劫の本地を顕あらわわしたことをいう。法華經が爾前經と比較ひかくして法門の内容がすぐれている二つの特徴をいい表わしたものである。

爾前經では二乗作仏は説かれず、したがって十界互具、一念三千が明かされていないが、法華經迹門にくると、二乗作仏が説かれる。本門寿命品では始成正覺の方便を開いて久遠の成道が明かされた。

爾前經に記小久成が明かされていないことについては、顯謗法抄(四五八頁)に「諸大乘經の中の理は未開会の理いまだ記小久成これなし法華經の理は開会の理・記小久成これあり」とあり、このことは開目抄上(一九七頁)にも説かれている。

また、真言宗では大日經に記小久成が説かれているとして、「大那羅延力」が二乗作仏を、「我一切本初」が久遠実成を表わしているなどとしているが、日寛上人は三重秘伝抄(富要三卷二七頁)のなかで「彼の經の始末に都て二乗作仏の義無し、若し有りと言わば正しくその劫・国・名号は如何……我一切本初とは是れ法身本有の理に約す、何ぞ今經の久遠実成に同じからんや……故に知んぬ真言教中に記小久成・一向に之無きことを」と破折されている。

【略開近顯遠】

略して、ほぼ近(始成正覺)を開いて、遠(久遠実成)を顯わす、ということ、仏の生命の長遠なことをほぼ説いた涌出品の文をいう。

釈尊は爾前四十余年の經でも、また無量義經でも法華經方便品でもインドに生まれてから修行して成仏したと説いている。(開目抄上一九六頁)

ところが法華經の本門にはいった最初の涌出品で地涌の菩薩が出現したのを見て、一座の大衆は大いに驚き、これら地涌の菩薩たちは、どこの国からきたのか、なんという仏の弟子で、なんという仏法を修行したのか等と質問した。

これに答えて仏は「我れ伽耶城菩提樹下に於いて坐して、最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を転じ、爾して乃ち之を教化して、初めて道心を發さしむ、今皆不退に住せり、悉く當に成仏を得べし、我今実語を説く、汝等一心に信ぜよ、我久遠より来、是れ等の衆を教化せり」と説いている。すなわち地涌の菩薩こそ自分の第一の弟子であるといった。これが略開近顛遠の文である。

【廣開近顛遠】

「廣く近を開いて遠を顛わす」と読む。略開近顛遠の文が、さらに廣開近顛遠の説かれる因となるのである。涌出品において「我久遠より来、是れ等の衆を教化せり」と説かれたのを聞いた大衆はさらに驚き、釈迦仏は成仏してより、いまだ四十余年にしかないのに、どうしてこれほどたくさんの弟子を教化することができたのかと再び質問した。正しく、これに答えて説かれたのが如来寿量品の廣開近顛遠である。

寿量品第十六 然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佉劫なり。

すなわち一切世間の者は皆、釈尊が、この世で出家して成仏したと思っているが、実は自分が成仏したのは五百塵点劫という想像もできない遠い昔であると説いた。これによって仏の生命の長遠が説き顛われ、その仏

界には無始の九界を具し、また九界にも無始の仏界が具しているという、本因本果ほんいんほんがの法門が明かされたのである。（開目抄上一九七頁）

【発迹顯本ほつしやくけんほん】

迹はらを発はらつて本あらを顯あらわす。

インドに出現して初めて成道した釈尊しじようしやうかくの始成正覺の姿は、衆生を利益するための垂迹であり、その本地は五百塵点劫じんてんこう以来三世常住の仏であるが、爾前經から法華經迹門まではその本地を明かさなかった。法華經の迹門方便品第二では十如実相・二乗作仏を説いて理の一念三千を明かしたが、まだ始成正覺の姿を開かなかった。

本門の寿量品第十六にきて、久遠実成、すなわち五百塵点劫という久遠の昔に、すでに成道していたと、その本地を明かした。

この始成正覺の迹の姿を発はらつて、久遠の本地を顯あらわしたことを發迹顯本ほつしやくけんほんという。これによって、眞の十界互具、一念三千が説き明かされたのである。釈尊の出世の本懐ほんかいはこの寿量品にあり、永遠の生命を説いて結縁の一切衆生得道の道を明かしたのである。

開目抄上（一九七頁） 此等の經經（爾前經）に二つの失とがあり、一には行布を存するが故に仍なお未だ權を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を発せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨こうこつ・一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二

種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顯本せざれば・まことの一念三千もあらはれず
二乗作仏も定まらず、乃至本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教
の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって本門の十界の因果をとぎ顯す、此即ち本因本果の法門
なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて・眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

【六難九易】

法華經見宝塔品に説かれていて、法華經を持つことのむずかしさを、譬えをもつて示したものである。

諸の善男子、各諦かに思惟せよ、此れは為れ難事なり、宜しく大願を発すべし、諸余の經典、数恒沙の如
し、此等を説くと雖も、未だ難しと為すに足らず、若し須弥を接つて、他方の、無數の仏土に擲げ置かん
も、亦未だ難しと為ず、若し足の指を以つて、大千界を動かし、遠く他國に擲げんも、亦未だ難しと為ず、
若し有頂に立つて、衆の爲に、無量の余經を演説せんも、亦未だ難しと為ず、若し仏の滅後に、惡世の中に
於いて、能く此の經を説かん、是れ則ち難しとす、仮使人有つて、手に虚空を把つて、以つて遊行すとも、
亦未だ難しと為ず、我が滅後に於いて、若しは自らも書き持ち、若しは人をして書かしめん、是れ則ち難
しとす、若し大地を以つて、足の甲の上に置いて、梵天に昇らんも、亦未だ難しと為ず、仏の滅度の後に、
惡世の中に於いて、暫くも此の經を読まん、是れ則ち難しとす、仮使劫焼に、乾ける草を担い負つて、中に
入つて焼けざらんも、亦未だ難しと為ず、我が滅度の後に、若し此の經を持ちて、一人の爲にも説かん、是

れ則ち難しとす、若し八万、四千の法蔵、十二部經を持ちて、人の為に演説して、諸の聴かん者をして、六神通を得せしめん、能く是の如くすと雖も、亦未だ難しと為ず、我が滅後に於いて、此の經を聴受して、其の義趣を問わん、是れ則ち難しとす、若し人法を説いて、千万億、無量無數、恒沙の衆生をして、阿羅漢を得、六神通を具せしめん、是の益有りと雖も、亦未だ難しと為ず、我が滅後に於いて、若し能く、斯の如き經典を奉持せん、是れ則ち難しとす。

すなわち六難とは一に広説此經難、二に書持此經難、三に暫読此經難、四に少説此經難、五に聴聞此經難、六に受持此經難である。

また九易とは一に余經説法易、二に須弥擲置易、三に世界足投易、四に有頂説法易、五に把空遊行易、六に足地昇天易、七に大火不燒易、八に広説得通易、九に大衆羅漢易である。

【竜女・提婆】

竜女とは竜の女身をいい、大海の娑竭羅竜王の女、八歳の竜女をさす。この竜女が文殊師利菩薩が竜宮で法華經を説いたのを聞いて菩提心を起こし、次いで靈鷲山で釈尊の説法を聞いて即身成仏の相を示し、女人成仏の現証を現わした。これを竜女作仏というのである。法華經にのみ説かれた法門であり、提婆達多品第十二に説かれている。

開目抄下（二二三頁） 宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫曉あり、提婆達多は一闍提なり天王如

来と記せらる、涅槃經四十卷の現証は此の品にあり、善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあげ万ををさめ枝をしたがふ、一切の五逆・七逆・謗法・闍提・天王如来にあらはれ了んぬ毒藥變じて甘露となる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乘經には成仏・往生をゆるすやうなれども或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、挙一例諸と申して竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあげたるなるべし。

これを提婆品の二個の諫曉といい、一代諸經の成仏・不成仏を明らかにしたものである。

提婆達多は、一生を通じて徹底的に仏に反対した一闍提でありながら、しかも法華經においては天王如来と授記されている。

そして善星比丘や阿闍世王等のように、釈尊在世の無量の五逆罪謗法の者のなかから、極惡の提婆をあげて、その成仏を明かしたことは、一切の五逆・七逆の罪を犯した謗法・闍提もすべて天王如来の授記によつて、成仏を決定されたのである。

また竜女の成仏も、ただ一人の成仏を顕わしたものでなく、一切の女人の成仏を顕わしたものである。法華經以前のもろもろの小乗經には、女人の成仏を許さなかった。またもろもろの大乘經には、女人の成仏を許すようであるけれども、それは即身成仏ではなくて、改悔し發心した後に許される改転の成仏であり、一念三千の即身成仏ではないから、有名無実の成仏往生である。

「一を挙げて諸に例す」とあるように、竜女の成仏は末代女人の成仏の道をふみあげたもののなのである。

【大通智勝仏】

法華經化城喻品に説かれる仏である。三千塵点劫という遠い昔に出世して法華經を説いたといわれる仏で、大相という時代に好成国の轉輪聖王の太子として生まれた。国王となつて十六人の王子をもつたが、後に出家して修行を積み仏となつた。二万劫の間、法華經を説かなかつたが、十六王子の請いによつて説いた。そのとき、十六王子と少しの声聞は法華經を信受して功德を得たが、多くの衆生は疑いを起こして信じなかつたので、十六王子が諸国へ行つて父の説いた法華經を繰り返して多くの衆生を化導した。これを大通覆講といい、その説法を聞いたことを大通結縁という。

十六人のうち、東方に二仏、すなわち阿閼と須弥頂、東南方に二仏、師子音と師子相、南方に二仏、虚空住と常滅、西南方に帝相と梵相、西方に阿弥陀と度一切世間苦恼、西北方に、多摩羅跋栴檀香神通と須弥相、北方に雲自在と雲自在王、東北方に壊一切世間怖畏と、そして第十六番目が釈迦牟尼仏である。

【三箇の勅宣】

釈尊滅後の弘經を勧めたのが宝塔品の三箇の勅宣である。提婆品の二箇の諫曉と合わせ五箇の鳳詔という。開目抄下（二一七頁）疑て云く当世の念仏宗・禅宗等をば何なる智眼をもつて法華經の敵人・一切衆生の

悪知識あくちしきとはしるべきや、答えて云く私の言を出すべからず経釈きょうしやくの明鏡を出して謗法ぼうぼうの醜面しゆうめんをうかべ其の失を
みせしめん生盲いきめくらは力をよばず、法華經の第四宝塔品に云く「爾その時に多宝仏・宝塔の中に於て半座を分ち釈
迦牟尼仏に与う、爾の時に大衆二如来の七宝の塔の中の師子の座の上に在して結跏趺坐けつかふざし給うを見たてまつ
る、大音声あまねを以て普く四衆に告げ給わく、誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん、今正しく是
れ時なり、如来久しからずして当に涅槃ねはんに入るべし、仏此の妙法華經を以て付属ふぞくして在ること有らしめんと
欲す」等云云、第一の勅宣なり。（付嘱有在）

又云く「爾その時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説いて言く、聖主世尊しやうしゆせそん・久しく滅度し給うと雖も
宝塔の中に在いまして尚法なほの爲に來り給えり、諸人云何いかにぞ勤めて法に為むかはざらん、又我が分身の無量の諸仏・恒
沙等じやの如く來れる法を聴きかんと欲す各妙なる土及び弟子衆・天人・竜神りゆうじん・諸の供養の事を捨てて法をして久
しく住せしめんが故に此に來至し給えり、譬たとえば大風のた小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以て法をして久
しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の經を護持し誦誦せん今仏前に於て自ら誓言を説
け」第二の鳳詔ほうしやうなり。（令法久住りやうぼうくじゆう）

「多宝如来および我が身集むる所の化仏当に此の意を知るべし、諸の善男子・各諦あきらかに思惟しゆいせよ此れは為れ
難き事なり、宜よろしく大願を發おこすべし、諸余の經典數・恒沙ごうしやの如し此等を説くと雖も未だ為れ難しとするに
足らず、若し須弥しゆみを接とつて他方無數の仏土に擲なげ置かんも亦未だ為れ難しとせず、若し仏滅後・惡世の中に
於て能く此の經を説かん是則すなわち為れ難し、仮使たとい劫燒に乾かれたる草を担にない負うて中に入つて燒けざらんも亦未
だ為れ難しとせず、我が滅度の後に若し此の經を持ちて一人の爲にも説かん是則すなわち為れ難し、諸の善男子、

我が滅後に於て誰か能く此の経を護持し読誦せん、今仏前に於て自ら誓言を説け」等云云、第三の諫勅なり、（六難九易）第四・第五の二箇の諫曉・提婆品にあり云云。
以上が宝塔品の三箇の勅宣である。

【本門八品の意味】

本門の八品とは涌出品より囑累品にいたる八品であり、この八品の間に地涌の菩薩が来現していたのである。虚空会の儀式は宝塔品より起こって囑累品に終わる。すなわち本門の八品というのは付囑の儀式がなされた期間であり、その肝要である本尊と本仏は、寿量品で説き顕わされているのである。しかるに日蓮宗八品派は八品正意と立てているので、ここに関連する御文を若干引いて、その非を破折しておこう。

観心本尊抄（二四七頁） 此の本門の肝心南無妙法蓮華経の五字に於ては仏猶文殊薬王等にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八品を説いて之を付属し給……是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の間にも但八品に限る。

観心本尊抄（二五三頁） 地涌千界は……但八品の間に来還せり。

御義口伝下（七七〇頁） 惣じて妙法蓮華経を上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り・寿量品の時事顕れ・神力属累の時事竟るなり。

御義口伝下（七八二頁） 宝塔品に事起り……涌出寿量に事顕れ神力・属累に事竟るなり。

新尼御前御返事（九〇五頁） 今此の御本尊は……宝塔品より事をこりて寿量品に説き顕し神力品・属累に
事極りて候いしが云云。

日女御前御返事（一二四三頁） 抑此の御本尊は在世五十年の中には八年・八年の間にも涌出品より属累品
まで八品に顕れ給うなり。

以上の各御書にご明示のように宝塔の出現は宝塔品より起こり、宝塔中に釈迦多宝の二仏および地涌の大菩薩等が雲集せる儀式は、涌出品より起こって、付嘱の終了する神力品・嘱累品で終わるのである。本尊と仏はただ寿量品に限る。ゆえに本尊抄（二四八頁）においても「未だ寿量の仏有さず」「本門寿量品の本尊並びに四大菩薩」と仰せられて「八品の仏」「八品の本尊」とは説かれていない。また開目抄上（一八九頁）には「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」下山御消息（三五九頁）には「寿量品の肝要たる南無妙法蓮華経の五字」等と明かされ、すべて「八品の文底」「八品の肝要」等とは説かれていない。ゆえに八品正意・八品の題目等と立てるのは大きな誤りである。

【勸持品】

勸持品第十三では八十万億那由佗の大菩薩が仏滅後の弘経を誓っている。すなわち法師品より仏は滅後の弘法を勧進し、宝塔品には三箇の勸宣（開目抄下二一八頁）を下して「我が滅度の後誰か能く此の経を護持し誦せん、今仏前に於て自ら誓言を説け」といい、さらに提婆品には惡逆の提婆と畜生の竜女の成仏を説いて、

二箇の諫曉（開目抄下二二三頁）を説いた。これに対して諸の大菩薩は、仏滅後の五濁惡世に三類の強敵をうけ、いかなる迫害をうけようとも、わが身命を愛せずと誓い、勸持品の二十行の偈で結んだ。

勸持品の二十行の偈とは、諸の菩薩が「仏の滅度の後の恐怖惡世の中に於いて、我等当に広く説くべし」と、末法に俗衆増上慢、道門増上慢、僭聖増上慢の三類の強敵が出現することを予告した後「是の經を説かぬが為の故に、此の諸の難事を忍ばん、我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」と誓った偈である。

日蓮大聖人は、これを末法本仏出現の予言とされて、次のように仰せられている。

開目抄上（二〇二頁）而るに法華經の第五の卷・勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此の国に生れずば・ほとと世尊は大妄語の人・八十万億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし。

開目抄下（二二三頁）已上五箇の鳳詔にをどろきて勸持品の弘經あり、明鏡の經文を出して当世の禪・律・念仏者・並びに諸檀那の謗法をしらしめん、日蓮といふ者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしろして有縁の弟子へをくればをそろしくて・をそろしからず・みん人いかに・をぢぬらむ、此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。勸持品に云く（以下勸持品の偈があり）

法華經においては、次いで涌出品に地涌の菩薩が出現し、寿量品を説法の後、不輕品にいたって末法の折伏弘通を如実に示している。その関連について、

寺泊御書（九五三頁）過去の不輕品は今の勸持品今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未来は不輕品為る可し、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為る可し。

【多宝の塔】

迹門しやくもんの流通分るつうぶんである見宝塔品第十一において多宝塔が虚空こくうに起ち、釈迦・多宝の二仏が宝塔の中に並座びやうざし、十方分身の諸仏、迹化他方しやつけたほうの大菩薩・二乘・人天等がこれに連なつらっていわゆる虚空会こくうえの儀式が説かれている。この宝塔はその名のように、七宝で飾られている。

見宝塔品第十一 爾その時に仏前に七宝しつぽうの塔あり。高さ五百由旬ゆじゆん、縦広二百五十由旬なり。地より涌出して、空中に住す在す。種種の宝物をもつて、之を莊校しやうきやうせり。五千の欄楯らんじゆんあつて、龕室がんしつ千万なり。無數の幢幡どうばん、以もつて嚴飾ごんじきと為し、宝の瓔珞ようらくを垂たれ、宝鈴万億ほうりやうまんゑくにして、其の上に懸かけたり。四面に皆、多摩羅跋栴檀たまらばつぜんたんの香を出だして、世界に充徧じゆうへんせり。其の諸もろもろの幡蓋ばんがいは、金、銀、瑠璃るり、碑磔しやく、碼碯めう、真珠、玫瑰まいえの七宝を以もつて合成ごうじやうし、高く四天王宮に至る。

御義口伝上（七三九頁） 御義口伝に云く七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慙ぜんなり、又云く頭上の七穴なり、今日蓮等ちやうたうの類たぐひい南無妙法蓮華經と唱え奉るは有七宝の行者なり云云。

そして、この多宝の塔は虚空こくうにあつて、釈迦仏多宝仏が坐を並べ、日月が同時に青空へ並び出でたような莊嚴ごんげんさであつた。人天大会にんてんたいえの大衆は星を連つらねるように虚空にならび、分身の諸仏は大地の上で、宝樹ほうじゆの下したの師子しし座ざにましました。このように莊嚴雄大な儀式は爾前經にぜんでは、とうてい見ることができなかった儀式である。

これははなはだ非科学的のように思われるが、しかし、仏法の奥底おくていからこれを見れば、きわめて自然な

儀式である。もしこれを疑うなら序品の時にすでに大不思議がある。数十万の菩薩や声聞や十界の衆生が、ごとく集まって釈尊の説法を聞くようになってゐるが、こんなことができるかどうか。拡声器もなければまたそんな大きな声が出るわけがない。まして八年間も、それが続けられるわけがない。すなわちこれは釈尊己心の衆生であり、釈尊己心の十界であるから、何十万集まったといつても不思議はない。ゆえに宝塔品の儀式も、観心の上に展開された儀式なのである。われわれの生命には、仏界という大不思議の生命が冥伏してゐる。この生命の力および状態は、想像もおよばなければ筆舌にも尽くせない。しかしこれをわれわれの生命体の上に具現することはできる。現実になれわれの生命それ自体も、冥伏せる仏界を具現できるのでと説き示したのが、この宝塔品の儀式なのである。すなわち釈尊は宝塔の儀式をもつて、己心の十界互具一念三千をあらわしてゐるのである。日蓮大聖人は、同じく宝塔の儀式を借りて、寿量文底下種の法門を、一幅の御本尊として建立されたのである。されば御本尊は、釈尊の宝塔の儀式を借りてこそおれ、日蓮大聖人已心の十界互具一念三千——本仏のご生命なのである。

次に多宝の塔には二つの意があり、一にはすでに説いてきた迹門を眞実なりと証明するため、二には後に本門を説き起こすためである。これは天台の法華文句に法華經見宝塔品の多宝の塔を釈して述べてゐる。すなわち見宝塔品で多宝塔が涌現して、多宝如来が「善哉善哉……妙法華經……如所説者皆是眞実」と証明したのは前十品の迹門の眞実なることを証明したのであり、これを証前（迹門を証するの意）の宝塔といい、次に多宝塔を開かんがために十方分身の諸仏を集め二仏並座して、滅後の弘通を付嘱すべき地涌の菩薩を召して、寿量品（本門）を説く起となる。これを起後（本門を起こすの意）の宝塔というのである。

御義口伝上（七三九頁）には「御義口伝に云く宝とは五陰おんなり塔とは和合わがくなり五陰和合を以て宝塔と云うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經と唱え奉る者は見宝塔なり」と仰せである。

【靈鷲山】

梵語ぼんごでは耆闍崛山しやくくせんといわれる靈鷲山は、インドのベンガル州にある山で、三千年前、釈尊が、法華經を説いた場所のことである。その南の尸陀林しだらんが死人捨すて場で鷲わしがきたので「鷲山」といい、三世諸仏の心法である法華經がとどまっているので「靈山」という。

御義口伝下（七五六頁）第十四時じがぎゆうしゆそうくしゆつりようじゆせん我及衆僧俱出靈鷲山の事。御義口伝に云く靈山一會いちえげんなんみさん儼然未散の文なり、時とは感応末法の時なり我とは釈尊・及とは菩薩・聖衆を衆僧と説かれたり俱とは十界なり靈鷲山とは寂光土なり、時に我も及も衆僧も俱に靈鷲山に出ずるなり秘す可し秘す可し、本門事の一念三千の明文なり御本尊は此の文を顯あらわし出だし給うなり、されば俱とは不變真如ふへんしんによの理りなり出とは隨緣真如ずいえんしんによの智ちなり俱とは一念なり出とは三千なり云云……出とは靈山淨土に列出するなり靈山とは御本尊並びに日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住所を説くなり云云。

すなわち日蓮大聖人の仏法から、これをみれば、人法一箇にんぼういつかの本門戒壇の大御本尊の住所こそ靈鷲山である。また総じては大御本尊を信じて題目を唱える者の住所はいかなる所でも靈鷲山なのである。具体的には娑婆世しゃは

界、そのなかにも日本国、日本国のなかにも富士大石寺こそ靈鷲山である。「靈山の一会儼然として未だ散らず」との文の意もここにある。

【自我偈】

法華經の如来寿量品第十六にある有名な偈で、自我得仏来から速成就仏身までをいう。

偈とは偈他の略称で、仏の徳、仏の教えを賛嘆する詩のこと。偈他は梵語で、訳せば頌という。また偈には通偈と別偈があつて、別偈のなかの重頌というのは、長行に説いたのを、さらに重ねて、偈頌をもつて説くのをいう。自我偈はこれにあたり、寿量品の肝心を再び述べたものである。

法蓮抄（一〇四九頁） 自我偈の功德は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ法華經は一代聖教の骨髓なり自我偈は二十八品のたましひなり。

御義口伝下（七五九頁） 自とは九界なり我とは仏身なり偈とはことわるなり本有とことわりたる偈頌なり深く之を案ず可し、偈様とは南無妙法蓮華經なり云云。

御義口伝下（七五九頁） 自とは始なり速成就仏身の身は終りなり始終自身なり中の文字は受用なり、仍つて自我偈は自受用身なり法界を自身と開き法界自受用身なれば自我偈に非ずと云う事なし、自受用身とは一念三千なり、伝教云く「一念三千即自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

日蓮大聖人の仏法では、以上のような、重々の深意があるのである。

【三世間】

三世間とは五陰世間と衆生世間と国土世間である。

世間とは差別の義である。Aの人とBの人を比べてその二人の五陰の差別を五陰世間という。仏界の衆生と人界の衆生とを比べるような差別を衆生世間という。同様に国土の差別を国土世間という。

五陰とは色・受・想・行・識である。色とは色質すなわち物質、わが肉体をいい、受とは受領の義で六根（五官と意識）をもって外界の事物を受領することをいい、想とはその受領した外境に対して、種々の思想を生ずることをいい、行とはその思想によって、また自己が視聽言動の行為を現わすことをいい、識とは思慮分別するところの智慧をいう。この五陰はつまり各人自己の心身をいうのであり、この自己の心身はみなそれぞれ他と相違があるので五陰世間という。陰とは「おおいかくす」の意と「あつまる」の二つの意味がある。「おおいかくす」という意味で九界に約せば善法をおおおいかくしており、仏界に約せば慈悲におおわれていることになる。「あつまる」の意味で九界に約せば生死の苦しみのあつまりであり、仏界に約せば常樂が集まっていることになる。

五陰が仮に和合するのを衆生という。十界にはそれぞれの衆生がおり、仏界は尊極の衆生である。各衆生それぞれ差別を生じて、十界の衆生となっていて、ところを衆生世間というのである。五陰世間と衆生世間とは自

他の両面をあらわしたものである。

国土とは十界の衆生（正報）が住する依報・非情の国土をいうのである。仏は寂光土、菩薩は実報土、二乗は方便土、天は宮殿、人は大地、地獄は赤鉄に住する等のようである。このように衆生の住する国土に差別があるので国土世間という。

【今此三界】

法華經譬喻品第三の文で、釈尊は娑婆世界の一切衆生の主であり師であり親であることを明かして、「今此の三界は、皆是れ我が有なり（主の徳）、其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり（親の徳）、而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を為す（師の徳）」とある。

三界とは衆生の輪廻する境界を三種類に分けたもの。六道の凡夫の住処をいう。欲界、色界、無色界の三つで、欲界とは欲望の世界、色界とは物質だけが存在する世界、無色界とは物質のない精神の世界をいう。

産湯相承事（八七九頁） 日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、今久遠下種の寿量品に云く「今此三界皆是我有（主君の義なり） 其中衆生悉是吾子（父母の義なり） 而今此処多諸患難（国土草木）唯我一人能為救護（師匠の義なり）」と云えり、三世常恒に日蓮は今此三界の主なり。

日蓮大聖人こそ、主師親の三徳を具備された、末法の本仏であることを明らかにされている。

ここに、日蓮大聖人が、譬喻品を久遠下種の寿量品とされたのは、御本仏の内証の立ち場からである。す

なわち「久遠下種の寿量品」とは、わが内証の寿量品と等しく、寿量品の仏こそ三徳具備の仏であるゆえに文は譬喩品にあるといえども、その義は寿量品の文底にある。

【不輕品の意義】

法華經の常不輕菩薩品第二十には、大要次のように説かれている。ずっと遠い昔に威音王如来という仏がいた。この仏の滅後、像法年間に、常不輕菩薩という菩薩がいて「我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」といって一切の人々をことごとく礼拝していた。ときに国中に謗法者が充滿しており、不輕菩薩を見て、皆これを迫害した。しかし、いかなる迫害にも屈することなく、不輕菩薩は、もっぱら礼拝の一行を全うしていた。かくて不輕菩薩は仏身を成就することを得たが、不輕を輕賤した者は、その罪によって千劫阿鼻地獄に落ちて大苦惱をうけ、その罪を畢え已って、また不輕菩薩の教化をうけ成道することができた、と。日蓮大聖人は、この不輕菩薩について次のように仰せられている。

佐渡御書（九六〇頁） 日蓮は過去の不輕の如く当世の人人は彼の輕毀の四衆の如し人は替れども因は是なり。

曾谷入道等許御書（一〇二七頁） 今は既に末法に入って在世の結縁の者は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ彼の不輕菩薩末世に出現して毒鼓を撃たしむるの時なり。

聖人知三世事（九七四頁） 我が弟子達之を存知せよ日蓮は是れ法華經の行者なり不輕の跡を紹繼するの故

に輕毀きやうきする人は頭こころ七分に破われ・信ずる者は福を安明あんみやうに積まん。

反対する者にも強しいて法を説き、信じない者は謗法ぼうぽうの罪によって、いったん地獄へ落ちて後、救われることを教示されているのである。日蓮大聖人の仏法とこの不輕菩薩の振舞いは、法体は異なるが、弘經こうきの方軌、方程式は同じである。これを逆縁ぎやくえんの功德という。日蓮大聖人の仏法は、釈迦仏法では救えない謗法不信の者をも救う力があると、次のように仰せられている。

諫曉八幡抄かんぎやうはちまん(五八九六) 仏は法華經謗法ほうぼうの者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乘ごうてきの強敵充滿すべし不輕菩薩の利益此れなり。

【浄蔵・浄眼】

法華經妙莊嚴王本事品第二十七に説かれている。昔、雲雷音宿王華智仏うんらいおんしゆくおうちという仏がいて、その時の王を妙莊嚴王といった。王の夫人を浄徳夫人じやうとくといい、そこに浄蔵・浄眼という二人の子供がいた。

この浄蔵・浄眼は仏の教えを信じ、無量の功德を得て、母の浄徳夫人と共に出家し、仏のもとで修行した。父はこれに反対したので、母は二人の子供に「おまえたち二人で、父の面前で不思議を現じてみせなさい」といった。そこで二人の子供は大いに仏道に励み、父の前でいろいろな神通力じんずうりきを現じて見せたのである。父王は感心して「おまえたちは、誰だれについて、このような、不可思議ふかしぎな力を学んだのだ。自分もその師匠のもとについて、教えをうけたい」といって、さっそく二人に従って仏の教えをうけ、仏道を成就することができたので

ある。そのときの妙莊嚴王とは、いま法華經の會座えざにいる華德菩薩けとくぼさつであり、淨藏・淨眼は藥王・藥上菩薩なのである。

さらに、さかのぼった過去世では、この四人は共に仏道修行に励む仲間であつた。四人とも修行に出かけてしまつては、食事の用意をする留守番るすばんがいなくなつてしまふので、四人のなかの一人が食糧を集め、薪たきぎをつくり、水をくんで給仕を務め、三人はもっぱら仏道修行に励んで、ついに成仏することができた。仏に給仕した者が、その功德によつて国王と生まれたとき、他の三人はそれぞれ夫人と、二人の王子に生まれて、国王を折伏して入信させ、ついに仏道を成就じやうじゆせしめることができたというのである。

【四衆ししゆ】

經文の所々に「爾その時に世尊、四衆に圍繞いにしやうせられ……云云」とあるが、仏が説法するときには必ず集まつてゐる四種類の衆生を四衆という。

その四衆には二つの意味がある。一つは比丘びく、比丘尼びくに、優婆塞うぱさく、優婆夷うぱいを四衆、または四部の衆という。比丘とは男の出家・僧のこと、比丘尼は女の出家・尼のこと、優婆塞は男の在家の信者、優婆夷は女の在家の信者のこと。もう一つの四衆は發起衆ほつきしゆ、影響衆えいぎやうしゆ、當機衆とうぎしゆ、結縁衆けちえんしゆの四種類の衆生をいい、これを説會せつえの四衆ともいうのである。

發起衆とは、仏に対して説法を請こい、あるいは疑問を出したり、問答などを起こして仏の説法を發起させる

て、化導を助ける人をいう。当機衆とは、仏の説法を聞き、教えをうけて、その場でわかる人をいい、結縁衆というのは、そこで縁を結んで、未来に悟る人をいうのである。影響衆とは、仏のそばに従っていて、その仏の立派なことを証明する役目の衆生がそれである。たとえば、舍利弗尊者や弥勒菩薩は仏に質問をする、これは發起衆である。文殊や観音や妙音等の菩薩は、他の仏土から、釈尊の仏法を助けにきているのだから影響衆である。

このうち、發起衆は最も大事で、質問会等において質問を発する人は、これにあたる。

また、仏が、誰も質問しないのに、自ら「諸仏智慧、甚深無量……」と説き出す説法の方式を「無問自説」といい、その他、説法のやり方に十二の方式がある。そのために釈尊の經典を十二部經とも呼ぶ。

普通は、發起衆が仏に質問を発して、ついで仏が四衆に向かって説法をするという方式がとられている。

【ほんげ ふぞく本化付嘱しやつけと迹化付嘱】

本化の菩薩、すなわち地涌の菩薩に対する付嘱を本化付嘱といい、別付嘱ともいう。それに対して迹化他方の菩薩などに対する付嘱を迹化付嘱といい、総付嘱ともいうのである。

本化付嘱は法華經神力品第二十一に説かれる。すなわち神力品に「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者皆仏前に於て一心に合掌し尊顔を瞻仰して仏に白して言さく世尊・我等仏の滅後・世尊分身の所在の国土・滅度の処に於て当に広く此の經を説くべし」と、滅後流通の誓いを発するのである。

この發誓について天台は「但下方の發誓のみを見たり」と述べて、地涌の菩薩の發誓であることを証している。また道邊どうせんは「付屬とは此の經をば唯下方涌出の菩薩に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」と天台の文を解釈して、輔正記の中で述べている。本化の菩薩である上行等は久成の大菩薩である。

かくして、神力品に四句の要法が説かれ、結要付嘱けつようふしよをもつて、文底深秘ぶんていしんひの本門の本尊、妙法蓮華經の五字が付嘱された。これを本化に対する別付嘱というのである。そして、これは皆、滅後末法のためであつて、末法出現の三大秘法の大御本尊の流通分となっている。

次いで、嘱累品第二十二では「爾その時に釈迦牟尼むに仏・法座より起つて大神力を現じ給う右の手みぎを以て無量の菩薩摩訶薩いただきの頂なを摩なで乃至今もつ以て汝等なんだちに付屬す」と説いているように、地涌の大菩薩を先頭にして迹化他方の諸菩薩、梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・四天王等にいたる大衆に付嘱がなされた。本化・迹化に通じて付嘱されるゆえに、これを總付嘱ともいうのである。

さらに、總付嘱は法華經一經だけでなく前後一代の一切經にわたり、一代諸經を付嘱するについて体外の辺を迹化に付嘱した。これには二意があり、一には正像二千年の機のため、二には末法弘通の序分のためである。また一代諸經の体内の辺は本化に付嘱して文底の流通としたのである。ゆえに神力品では正宗を付嘱し、嘱累品では流通を付嘱している。御書に「神力嘱累に事極まる」等と仰せられているのはこの意である。

次いで藥王品以下涅槃經等にも地涌の菩薩が去つて後に重ねて付嘱があり、これを拈拾遺屬くんにじゆういぞくという。(觀心本尊抄三)

【摩訶止観】

天台大師が荊州玉泉山において著わしたもので、全十巻よりなり、法華經の肝心である理の一念三千が説き明かされているので、像法の法華經という。「摩訶止観」を著わしたことが、天台大師の出世の本懷である。「法華玄義」「法華文句」と共に天台の三大部とされている。

本書によって天台は諸大乘教の円義を総摂して一念三千の法門を立て、法華円頓の行法をあますところなく明かした。

天台大師の弟子・章安も摩訶止観冒頭の釈に「止観の明静なる前代に未だ聞かず」と書き、仏法の極意を説き明かしていることは、いまだかつて聞かなかったことである、と摩訶止観を称嘆している。

日蓮大聖人は兄弟抄（一〇八七）に、次のように仰せになっている。

されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事・一代聖教の肝心ぞかし、仏法漢土に渡って五百余年・南北の十師・智は日月に齊く徳は四海に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華經の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して三国の一切衆生に普く与へ給へり、此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に云く「止観の明静なる前代に未だ聞かず」云云、又云く「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞ

かし、此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の巻に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば將に人をして惡道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未來の資糧とせよ。

【六 即】

天台大師が、法華經の円意で立てた修行の位である。すなわち理即、名字即、觀行即、相似即、分真即、究竟即の六即位である。

理即とは迷いの凡夫であつても理の上で仏界を具しながらいまだ仏界が顕現されない位。名字即とは「三位の諦を聞く」位、また「一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する」位とされている。觀行即とは止觀に「所行は所言のごとく所言は所行のごとし」とあるように、実践がともなう位。相似即とは「八十八使の見惑を断じ、八十一品の思惑を断じ、九品の塵沙を断じた」位とされている。分真即とは、四十二位の無明のうち最後の元品の無明だけを残してあとの四十一品を断じた位とされる。究竟即とは元品の無明を断じた極聖の位をいう。末法の信心にあてはめて、日蓮大聖人の御書には次のようにある。

御義口伝下（七五二頁） 第一南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事。……六即の配立の時は此の品の如来は理即の凡夫なり頭に南無妙法蓮華經を頂戴し奉る時名字即なり、其の故は始めて聞く所の題目なるが故

なり聞き奉りて修行するは觀行即なり此の觀行即とは事の一念三千の本尊を觀ずるなり、さて惑障わくしょうを伏するを相似即と云うなり化他に出づるを分真即と云うなり無作むさの三身の仏なりと究竟くきやうしたるを究竟即の仏とは云うなり。

すなわち、理即の位は、いまだ信心しない人。名字即とは御本尊をいただいて信心した人。觀行即とは朝晩の勤行をきちんとやり、功德を感じている人。相似即とは三障四魔を粉碎ふんさいしていく人。分真即とは折伏に励み、御本尊流布に邁進まいしんしている人。究竟即の仏とは永遠の生命を感得した、成仏の境涯に達した方で、別しては、無作三身如来であられる御本仏日蓮大聖人お一人である。そして、日蓮大聖人の下種仏法では「即身成仏」のゆえに名字妙覺みょうじみょうかくといい、名字即の凡夫が御本尊を拝んで、仏の生命を感得したときが、すなわち妙覺の仏である。ゆえに天台宗のような立て分けはいらないのである。

【五十二位】

大乘の菩薩の修行する位を五十二に立て分けたもの。釈迦仏法の別教である華嚴經けごんや菩薩瓔珞本業經ようらくほんごうに説かれてゐる。

十信じゅうしん（信心・念心・精進心しやうじん・慧心・定心・不退心・回向心えこう・護法心・戒心・願心）

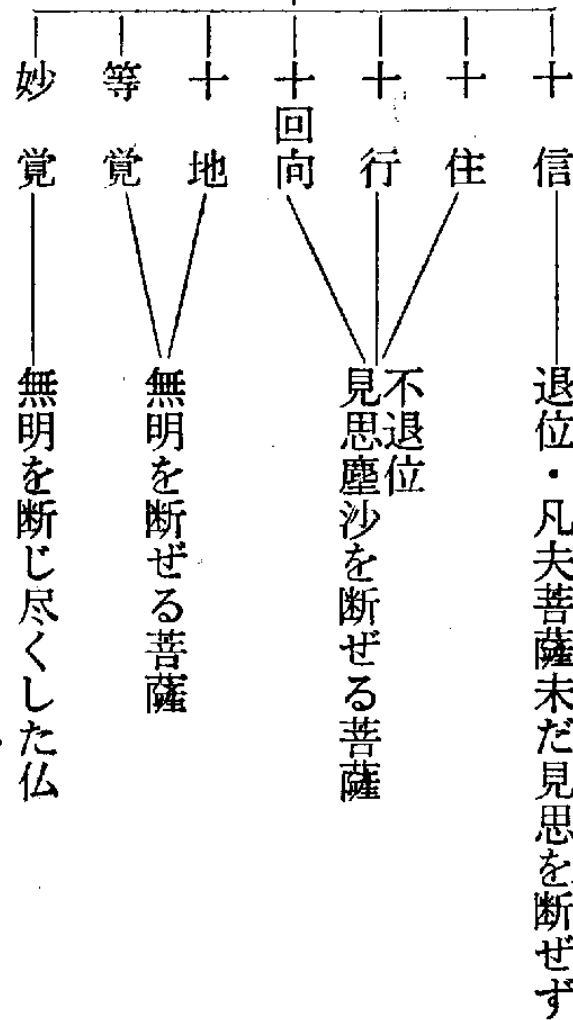
十住じゅうしゅう（發心住・治地住・修行住しゆぎやう・生貴住しやうき・具足方便住・正心住しやうしん・不退住・童真住どうしん・法王子住・灌頂住かんちやう）

十行じゅうぎやう（歡喜行・饒益行にやうやく・無違逆行・無屈撓行むくつたう・無癡乱行・善現行・無著行むじやく・難得行・善法行・眞實行しんじつ）

十回向えこう（救護衆生離衆生相回向・不壞一切回向・等一切諸仏回向・至一切処回向・無尽功德藏回向・入一切平等善根回向・等隨順一切衆生回向・真如相回向・無縛無著解脫回向・入法界無量回向）
 十地じゅうじ（歡喜地・離垢地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地）

等覺どうかく

妙覺みょうかく



一代聖教大意（三九五頁）此の教（別教）の意は五十二位を一一の位に多俱低劫を経て衆生界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山と成すが如し、華嚴・方等・般若・梵網・瓔珞等の經に此の旨分明なり、但し二乘界の此の戒を受くる事を嫌ふ、妙樂の釈に云く「徧く法華已前の諸經を尋ぬるに実に二乗作仏の文無し」文。
 この御文のとおり、五十二位の段階を経て成仏した者はいないのである。

【三種の教相】 さんしゆ きようそう

天台が、法華經と爾前經との勝劣を、三種の点において明らかにしたものである。

第一に根性の融不融の相 こんじやう ゆうふゆうのそう

爾前經では衆生の根性が種々に分かれて不同であり、その機根に応じて法が説かれた。すなわち声聞・縁覺・菩薩と、その説法もバラバラであつた。これは根性の不融である。

しかるに、法華經の迹門にくると、衆生の根性が熟して、みな一樣になつたため、法華一乗の法を聞くに耐えられるようになった。すなわち根性が円融して、すべて法華經の一仏乘に統合されたのである。そして、方便品でまず舍利弗が成仏の記別を受け、ついで譬喩品では迦葉等の四大声聞が、記別を受けるのである。これは根性の融である。

第二に化導の始終不始終の相 けどう しじゆうふ しじゆう

觀心本尊抄（二四九頁）に「設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは是なり」とある。仏の弟子に対する化導は、まず仏が弟子に仏種を下すことに始まる。ついで、それを熟させ、ついに得脱させることで、化導は終わるのである。これすなわち、化導の始終である。

しかるに、この過程が明らかにされたのは、法華經の迹門化城喩品第七において、大通下種、三千塵点劫が明かされたのが初めである。すなわち過去三千塵点劫の昔に、釈迦牟尼仏は、大通智勝仏の第十六王子とし

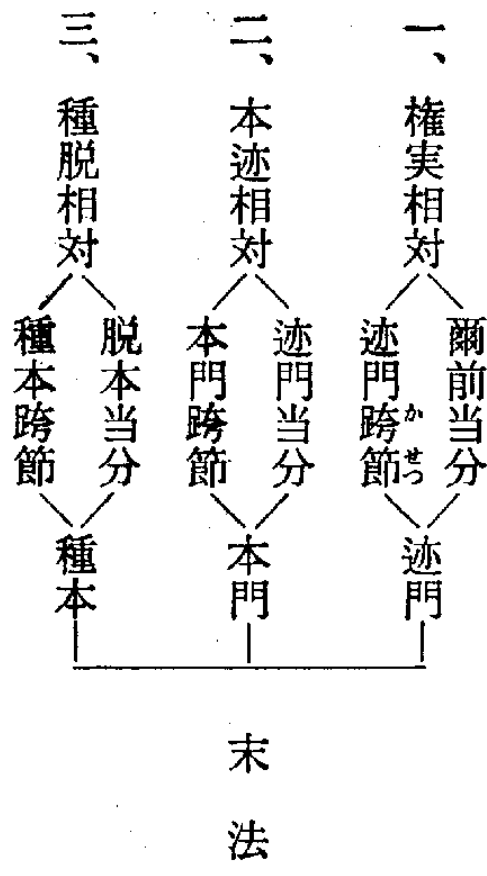
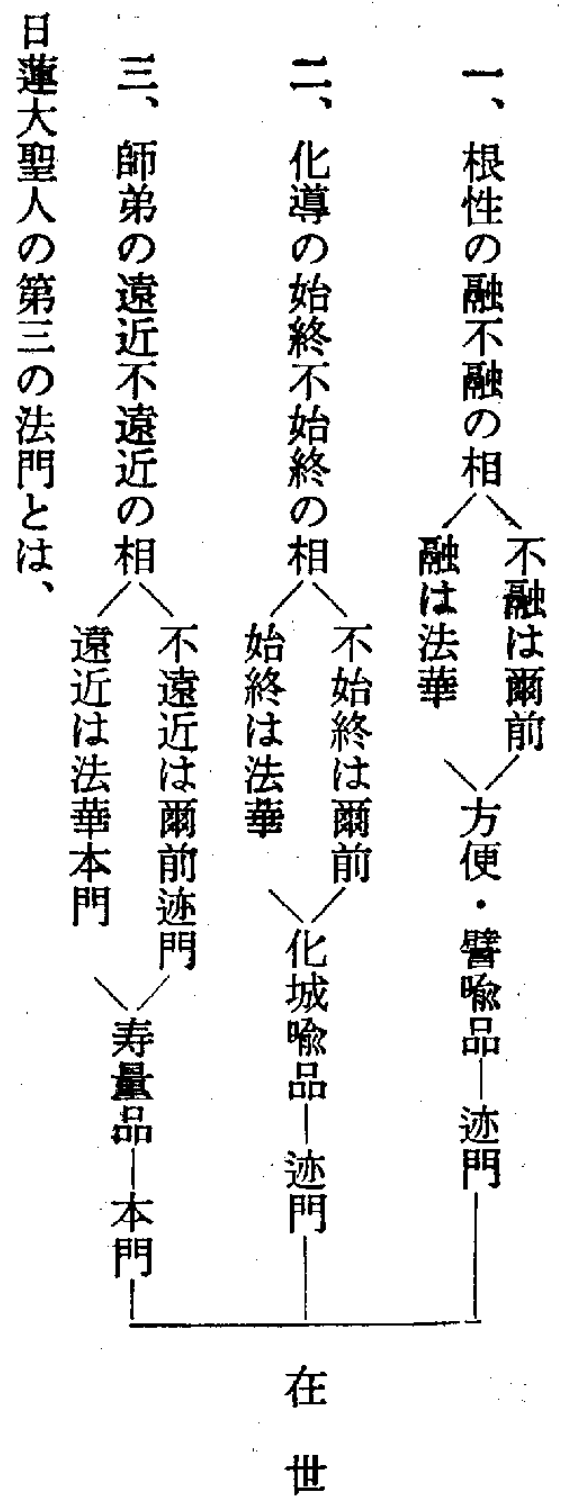
て、父の大通仏が説いた法華經を説法した。その法華經を聞いて仏の種子を植えた者が、いま法華經を聞いて成仏する声聞の弟子であると、その化導の始めを説き明かした。そして三千塵点劫の昔に下種した弟子の根性が熟したゆえに、いままたこの世に出現して、四十余年のあいだ教化してこれを調熟し、最後に法華經を説いて得脱させると、今日の化導の始めを明かしたものである。

第三に師弟の遠近不遠近の相

師弟の遠近と不遠近とは、仏の久遠の本地の開顯と不開顯との差である。すなわち、爾前經では、仏はその本地をかくして、この世に生まれて、初めて菩提樹の下で成道した始成正覺の仏であると説く。しかるに法華經本門壽量品では、五百塵点劫の昔に成仏し、それ以来、この娑婆世界に出現して衆生を教化してきたと仏の本地を明かされた。ここで、いまこの世での仏と弟子との関係は近いものである。しかし、この近い関係は、この世だけの関係ではなく、その過去をたずねれば、実は遠い五百塵点劫以来の長い間の師弟の関係があることが明らかにされたのである。このように仏と弟子との関係は、近くして、また遠いのである。これ師弟の遠近の相である。

「本此の仏に従って初めて道心を發し亦此の仏に従って不退地に住す」とは、この師弟の遠近の相を述べたものである。しかるに、仏の本地が明かされない爾前經ならびに迹門においては、仏は始成正覺の仏であるゆえ、仏と弟子との関係も、たんにこの世かぎりのものであるにすぎず、遠近の相が明かされないゆえ、不遠近というのである。

これを図表にし、また日蓮大聖人の第三の法門と比較するならば、



すなわち、日蓮大聖人の法門からみれば、天台の三種の教相の根性の融不融の相と化導の始終不始終の相は共に法華經迹門第一の法門で、權迹相對ごんしやくである。次に師弟の遠近不遠近の相は日蓮大聖人の本迹相對第二法門となるのである。さらに日蓮大聖人の第三の法門とは一重立ち入った種脱相對であり「日蓮が法門は第三法門なり」と仰せられたのがこれである。

常忍抄じょうにんしやう（九八一頁）總じて御心へ候へ法華經と爾前と引き向えて勝劣・淺深を判ずるに当分・跨節かせうの事に三つの様よう有り日蓮が法門は第三の法門なり、世間に粗夢はぼの如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門は天台・妙樂・伝教も粗之はぼを示せども未だ事了おえず所詮末法の今に譲ゆずり与えしなり。四條金吾殿御返事（一一一六頁）今日蓮が弘通くわうつうする法門は・せばきやうなれども・はなはだふかし、其の故は彼の天台・伝教等の所弘しやうくの法よりは一重立入いちぢやうりやうりたる故なり、本門寿量品の三大事とは是なり、南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すればせばきが如し、されども三世の諸仏の師範しはん・十方薩埵さつたの導師・一切衆生かい皆成仏道の指南しなんにてましますなれば・ふかきなり。

【五種の妙行】ごしゆ みようぎやう

五種頓修ごんしゆの妙行とも、五種の修行とも、五種法師ともいう。

法華經法師品第十にある文で「若し復人有またつて、妙法華經の、乃至一偈げを受持じゆじ、読誦どくじゆし、解説げせつ、書写しよしやし、此の經卷に於いて、敬うやまい視ること仏の如くにして云云」とある。

また、天台の文句には「此の品に五種法師あり、一に受持、二に読、三に誦、四に解説、五に書写なり云云」とある。

すなわち五種とは受持、読、誦、解説、書写をいうのであつて、読とは經文を見ながら読むこと、誦とは暗誦あんしやうすることである。また解説とは化他けたのために法を説くことであり、書写とは經文を書写する修行である。

しかし、末法今時においては日蓮大聖人は受持即觀心とされ、

日女御前御返事（一二四五）に「法華經を受け持ちて南無妙法蓮華經と唱うる即五種の修行を具足するなり、

此の事伝教大師入唐して道遠和尚に値い奉りて五種頓修の妙行と云う事を相伝し給ふなり。

受持をもって末法の正行とし一切の修行をすべて包含するのである。すなわち唱題・受持は正行、方便・壽量の二品誦誦は助行となるのである。

さらに、觀心本尊抄（二四六）には「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と、受持即觀心を明かされている。文の心は釈尊の因位の万行・果位の万徳は妙法五字に具足しているのであるから、妙法五字を受持すれば万行を修行したのと同じことになるのであると仰せである。日寛上人は末法相応抄上（富要三卷一五二）に、御本尊を受持して唱題することに五種の妙行を含むことを明かされている。

法師功德品に云く「若善男子、善女人、受持是法華經、若誦若誦若解説若書写、是人当得六根清淨」云云、此の文の中・若し字の顛わす所の五種の妙行に随って一行を修すれば即ち六根淨を得るなり……況んや復・五種の妙行は一部に限るに非ず、今信者の為に更に三義を示さん。

一には一字五種の妙行、修禪寺決に云く「妙の一字に於いて五種法師の行を伝う、広く五種を行せば心散乱する故に要に非ず、大師好んで常に此の行を修し、亦之を以て道俗に授く、和尚云く一字五種の妙行」云云。

二には要法五種の妙行、又云く「天台大師・毎日行法日記に云く誦誦し奉る一切經の總要毎日一万返」云云、玄師伝に云く「一切經の總要とは所謂南無妙法蓮華經の五字なり」云云。

三には略品五種の妙行、大覺抄十八（月水御書一二〇一頁）に云く「二十八品の中に勝れて・めでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行とを習ならい読ませ給え」云云。

三義分明・宛あたも日月の如し故に広く之を行ぜずと雖いえども五種の妙行を闕かくこと無し一部読誦の輩やから還りて闕かく所有り、本因妙抄（八七五頁）に云く「彼は一部を読誦すと雖いえども二字を読まざること之これ在り・此れは文文句句・悉ことごとく之を読む」云云。

また日寛上人は如説修行抄筆記（富要四卷四〇八頁）のなかで、次のようにいわれている。

五種法師の中の受持・読・誦・書写の四種の修行は自行じぎやうであり、解説は化他けたである。自ら妙法を受持し、読誦し、書写するのは自らの修行である。他人を教導して修心をなさしめるのは化他である。

五種の行という名は在世と同じであるけれども、行の相すがたは不同なのである。すなわち妙法を受持し、妙法を読誦し、妙法を解説するのである。また妙法を書写するのである。法華經一部を広く修行するのではなくて、略えらを簡かんんで肝心かんじんの五種の行である。

御義口伝下（七八三頁）にいわく「此の妙法等の五字を末法・白法びやくほう隱没いんもつの時上行菩薩・御出世有って五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏す可しと經文に親まのあたり之れ有り……此の經を受持し奉る心地は如説修行の如なり此の如の心地に妙法等の五字を受持し奉り南無妙法蓮華經と唱え奉れば忽たちまち無明煩悩むみょうはんぼんの病のうを悉ことごとく去みつて妙覺みょうかく極果ごくくわの廣はだえを瑩みかく事を顯す云云」と。

日女御前御返事（一二四五頁）にいわく「法華經を受け持ちて南無妙法蓮華經と唱うる即五種の修行を具足

するなり……日蓮が弟子檀那だんなの肝要かんよう是より外に求る事なかれ」と。

中古の掟おきてに云く「日蓮聖人は方便寿量の両品を助行に用いたもうなり。文を見て両品を読むは読、そらに自我偈よを誦よみむは誦なり、今此三界こんしさんがいの文を講じ塔婆とうばなどに題目を書写するは受持等の五種の妙行と意得こころうべきなり」受持無行余行徒然の故に受持の行は肝心である。末法今時の受持というのは本門の本尊たる題目の五字を信ずる義である。釈に云く「信力の故に受け念力の故に持つ」と。

御義口伝下（七八三頁）に云く「五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏べす可しと經文にまのあた親まのあたり之れ有り」と。同じく（七七二頁）云く「末法当今は此の經を受持する一行計ばかりにして成仏す可しと定むるなり」と。

故に末法は但受持の一行である。この受持の一行の中に余の四行を具すのである。誦誦とは南無妙法蓮華經と唱えることである。故に御義口伝上（七四三頁）に云く「誦持どくじ此經しきようの事、御義口伝に云く五種の修行の誦誦と受持との二行なり、今日蓮等ちんどうの類たぐい南無妙法蓮華經と唱となえ奉るは誦なり此の經を持たもつは持なり此經とは題目の五字なり」云云。

解説していわく、御義口伝下（七五六頁）に云く「末法に入つて説法とは南無妙法蓮華經なり今日蓮等の類たぐいの説法是なり」、御義口伝上（七四三頁）にいわく「説とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類たぐいは能須のうしゆ與説ゆせつの行者なり」と。

以上が日寛上人の如説修行抄筆記の一節である。これらの御文言によると、末法当今は受持の一行のなかに五種の行があるのである。熱益じゆくやくの五種の行を捨てて下種仏法の末法に相應した五種の妙行を立てるのである。

【從因至果・從果向因】

從因至果は從因向果ともいい、因より果に至るの意であり、從果向因とは果より因に向かうの意である。

從因至果については、百六箇抄（八五五頁）に「從因至果・中間今日の本迹、像法の修行は天台・伝教・弘通の本迹は中間・今日の迹門を因と為し本門修行を果と為るなり」と。またいわく「本果の妙法蓮華經の本迹、今日の本果は從因至果なれば本の本果には劣るなり、寿量の脱益・在世一段の一品二半は舍利弗等の声聞の為の觀心なり、我等が為には教相なり、情は迹劣本勝なり、又滅後像法相似・觀行解了の行益も以て是くの如し、南岳・天台・伝教の修行の如く末法に入つて修行せば帶權隔歷の行と成つて我等が為には虚戲の行と成る可きなり、日蓮は一向本・天台は一向迹・能く能く之を問う可し」とある。

また日寛上人は、末法相应抄下（富要三卷一七四頁）に百六箇抄の「今日の本果は從因至果す本の本果に劣る」の文をあげて「謂く今日の本果は迹の因門を開して本の果門を顕わす故に從因至果なり」と。

すなわちインド応証の釈尊は（今日の本果）迹の因門を開して本の果門（久遠五百塵点劫本果第一番成道の果）を顕わすゆえに從因至果なのである。ここにおける所顯の本果とは本因に望むならばなお本のうえの迹でしかないのである。

次に從果向因について、

百六箇抄（八六三頁）久遠從果向因の本迹、本果妙は釈迦仏・本因妙は上行菩薩・久遠の妙法は果・今日

の寿量品は花なるが故に従果向因の本迹と云うなり。

御義口伝上（七二九頁）末法に至って従果向因の「一雨を弘通するなり一雨とは題目に余行を交えざるなり。因に向かうとは久遠にたちもどるということである。」

さらに末法相応抄下（富要三卷一七四頁）には「本の本果は迹の本果を開して本の本因を顕わす故に従果向因なり、勝劣を言わば今日の本果は迹の因門を開して本の果門を顕わす、所顯の本果を若し本因に望むれば仍本の上の迹なる故に今日の本果は劣るなり、若し本の本果は迹の本果を開して本の本因を顕わす、所顯の本因は独一の本門の故に本の本果は勝るなり、所顯の法門・勝劣殊なりと雖も今日の本果は同じく是れ色相莊嚴の応仏昇進の自受用身なり」と。

すなわち従果向因は本の本因、下種独一本門のことをさすのである。

生活に約して論ずれば、折伏をうけて入信し、仏道修行に励んで幸福になっていく姿は従因至果であるが、その幸福になったという結果のそもその根本原因をたずねていくと、久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の本眷属として、三大秘法を信じていたという本因がわかるわけで、これが従果向因といえる。「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」（諸法実相抄一三六〇頁）とは従果向因である。

【四句の要法】

法華經神力品第二十一に次のようにある。

爾の時に仏、上行等の菩薩大衆に告げたまわく、諸仏の神力は、是の如く無量無辺不可思議なり。若し我、是の神力を以って、無量無辺百千万億阿僧祇劫に於いて、嘱累の爲の故に、此の經の功德を説かんに猶尽すこと能わじ。要を以って之を言わば、如来の一切の所有の法（名）、如来の一切の自在の神力（用）、如来の一切の秘要の藏（体）、如来の一切の甚深の事（宗）、皆此の經に於いて宣示顯説す。是の故に汝等如来の滅後に於いて、应当に一心に受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すべし。所在の国土に、若しは受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すること有らん。若しは經卷所住の処、若しは園中に於いても、若しは林中に於いても、若しは樹下に於いても、若しは僧坊に於いても、若しは白衣の舎にても、若しは殿堂に在つても、若しは山谷曠野にても、是の中に、皆心に塔を起てて供養すべし。所以は何ん。当に知るべし。是の処は即ち是れ道場なり。諸仏此に於いて阿耨多羅三藐三菩提を得、諸仏此に於いて法輪を轉じ、諸仏此に於いて般涅槃したもう。

以上の全文は、結要付嘱の文であり、四つに分けることができる。初めに称歎付嘱、これは付嘱する法体・本門の本尊の功德を歎ずるのである。「此の經の功德を説く」とは妙法蓮華經の功德である。

二に「要を以って之を言わば」からが、本尊付嘱である。この文を四句の要法といい、特に結要付嘱の中心をなしているのである。これは如来の一切の名体宗用、すなわち本門の本尊・妙法蓮華經の五字を宣示顯説するのである。ゆえに「皆此の經に於いて」というのである。また、この本尊をもって、地涌千界に付嘱するから本尊付嘱という。

結要勸持四

- 初に称歎付属・爾時仏告 猶不能尽
- 二に結要付属・以要言之 宣示顯説
- 三に正勸付属・是故汝等 起塔供養
- 四に釈勸付属・所以者何 而般涅槃

疏の十に云く「爾時仏告上行の下は是れ第三に結要付属なり」と云云、又云く「結要に四句有り、一切法とは一切皆是れ仏法なり此は一切皆妙名を結するなり・一切力とは通達無礙にして八自在を具す此れは妙用を結するなり・一切秘藏とは一切処に遍して皆是れ実相なり・此れは妙体を結するなり・一切深事とは因果は是れ深事なり此は妙宗を結するなり、皆於此經宣示顯説とは総じて一經を結する唯四ならくのみ其枢柄を撮つて之を授与す」と云云。

天台大師は、四句の要法をもつて結要付属といい、本尊付属とはいわなかった。それはなぜかといえ、
「内鑑冷然」であり、末法に譲るために、はつきりとはいわなかったのである。いまは末法であるから、末法適時の説き方をするわけである。次にその明文をあげることにする。

観心本尊抄（二四七）此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊藥王等にも之を付属し給わす何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八品を説いて之を付属し給う、其の本尊の爲体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩云云。（その本尊の体たらくとは、すなわち本門の肝心、南無妙法蓮華經の五字をさして「其の本尊」というのである）

新尼御前御返事（九〇五頁）今此の御本尊は教主釈尊・五百塵点劫より心中にをさめさせ給いて世に出現せさせ給いても四十余年・其の後又法華經の中にも述門はせずして宝塔品より事をこりて寿量品に説き顯し神力品・属累に事極りて候いしが……上行菩薩等を涌出品に召し出させ給いて、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字をゆづらせ給いて云云。

以上の二文を思い合わすならば、本尊付嘱の義は明らかである。

三に「是の故に汝等」の下は題目勸奨であり、四に「所在の国土の下」は戒壇勸奨である。（さらに詳しくは日寛上人の依義判文抄第三の第七の神力品の爾時仏告上行等の文を参照・富要三卷一二三頁）また、これを天台の五重玄に約せば、

如来の一切の所有の法——名玄義（三大秘法全体をさす）

如来の一切の自在の神力——用玄義……戒壇

如来の一切の秘要の蔵——体玄義……本尊

如来の一切の甚深の事——宗玄義……題目

となる。この文に三大秘法は明らかである。

すなわち妙法蓮華の名のなかに用（仏の化導する働き）体（仏の悟りの実体）宗（仏の悟りに達すべき行）があり、この用・体・宗は即本門の三大秘法にあてはまるのである。自在の神力は疑いを断じて信を生じさせる用で、われわれを大御本尊に帰依せしめ、成仏得道に入らしめるゆえに本門の戒壇であり、秘要の蔵は御本仏の体だから本門の本尊であり、甚深の事は修行だから本門の題目である。